

て土地を開拓することを計画し假に錢五島と名けしといふ其信否は知らざれども五兵衛の贈給此の事なしと謂ふべからず(以上安井の直話)嘉永五年獄中に歿す年八十、以上の事實に據て考ふればその密貿易は形迹見るべき者あるに似たり然れども當時藩の議議は専ら河北潟工事を以て處断し密貿易の事はたゞひ其の事實明確なる者あるも頗る外聞で傳るが爲に或して表白せりしなり(金澤陸義猶所記)

ゼニヤ ゼンベエ 錢屋善兵衛 狂歌師 日本橋二丁目に住せり性洒落滑稽な好み一家は之を其子に譲り自ら樂隱居と稱せり平素淨瑠璃を嗜む曾て嘉永元年某月某日我れ將に死すべしと述べ戯れに生前葬式の如く死んだりと言ふ洵に奇と謂ふべし

セノヲ イウサウ 潤尾雄三 医家、内科学
殊に歎蘭學及び血清療法の専門家、明治八年七月十日新潟縣中頃郡直江津に生る渡邊巖の三男、後潤尾原始の養子となる三十六年十一月東京帝國大學醫學部卒業入院内科副手を嘱託せられ陸軍輔助員に任ぜられ日露戰争に功あり醫科大學助手拜命間もなく辭して渡歐しクライフアルト大學にありてミニコウスキ教授に就き内科學專修した伯林大學傳染病研究所にてウクセルマン教授指導の下に歎蘭學及び血清療法專修す歸朝後函館病院となり十四年三月一日「歎蘭に因する馬尿酸の分解及び尿中の安息香酸及びグリココール證明の價値に就いて」博士論文を呈上し同窓會に血液及び肝臓に於けるリボイード量に就いて「他三個の参考論文を提出し醫學博士の學位を受く大正六年九月十日歿す年四十三(大日本博士錄)

セノヲ カネヤス 潤尾兼康 平維盛の臣、
備中の人、太郎と稱し潤尾莊を食む者水平中平維盛に従ひ源義仲を撃ち安宅派に戦ひ會光成澄の爲めに擒へられ將に斬られんこす義仲その狀貌を奇こして之を釋し成澄の弟成氏の家に屬して之を拘へしむ兼康心を屈して成氏に事へ甚だ歎心を得て說きて曰く潤尾莊は水草に善し君當に乞ひて之を得べし我れ爲めに懲辱せんと成氏、義仲に請ひて與に俱に往く兼康の子宗康聞きて來り迎へ播磨の國府に遇ふ行きて備前三石驛に抵る親朋酒を戴せ

て出家し横川に入りて顯密の教を聞く論壇に盛名あり一日自ら念らく我れ大小乘に於て既に通曉す頃聞く元法師より禪を異域に傳へ来ると彼何の長處かある吾當に思て之を試むべしと即ち深草に往き元師の上堂に遇ひ旁にありて傾聽す其の深遠宏大なるに驚き茫然として測るべからず因て服を易へ禮侍し之れを久うして契悟す永興庵を開て居す未だ幾ならずして四來の笠隠然として風に歸し誦まして一方の最祉となる法弟に僧海あり早く寂す(本朝高僧傳)

ゼンエ 善恵 高僧、證空と號す、姓は源氏、村上帝の後なり生るる時瑞祥あり長するに及びて丞相通親其の聰敏な喜び乞ひて子とす弱冠の頃通親の許可を得て出家し吉水寺の源公に投じて落髮す源之の器とし意を加へて訓誨す二十二にして苦薩の大戒を受く嘗て台教を頷蓮に禮き又密法を政春、慈鉢、公圓の三師に處く建保年中西山の三鉢寺に住して淨土を詔す學徒群集す演法の般常に彌陀經を誦すこゝ九千七百餘部、五部の大乗諸經及び草疏な刻すること若干卷又梵刹を創む十二区寶塔を建てる所以て天恩を貢く時に太上皇帝及び文武の大戒を受く寶治元年十一月二十六日伽黎をば彌陀經を誦し念佛して逝る年七十一、平生著はす所觀經祕訣集等三十餘卷あり(東國高僧傳)

ゼンカ 儂可 畫僧、某雪と號す、姓は領翁とも稱したるが如し周文に學びて彩墨の山水を善くせり大水頃人か扶桑畫人傳、扶桑名畫傳、本朝畫史、古畫考)、
近江の志賀郷に住す幼き時弟弟教と共に山王神境に群童の歌舞するを見る時に大驚あり飛来りて兄弟の頭に停る傍人扇な以て之を拂ふ神祇宣して曰く拂ふ勿れ怖る勿れ姓は山王の神使なり此二兒に登りて大法華誦すべきの祥なりと父母の言を信じて二兒を座主慈悲の許に托し髪を剃りて戒を受けしむ數年ならずして博く学んだりこの志賀郷に住す幼き時弟弟教と共に山王神境に群童の歌舞するを見る時に大驚あり飛来りて兄弟の頭に停る傍人扇な以て之を拂ふ神祇宣して曰く拂ふ勿れ怖る勿れ姓は山王の神使なり此二兒に登りて大法華誦すべきの祥なりと父母の言を信じて二兒を座主慈悲の許に托し髪を剃りて戒を受けしむ數年ならずして博く学んだり

在ること八年、印を解きて院に歸養し長徳三年八月朔日舊院に歿す年八十五(本朝高僧傳)
ゼンカ 全暇 畫家、赤猫齋と號す、京都の人、
其僕たり時に年二十六、才氣あり三郎兵衛の妻ささとせん

て來り終夜劇飲す成氏醉て臥す兼康、成氏を刺して之を殺しまだ源行家置く所の吏を備前國府に襲殺す是に於て兵士を招募して二千餘人を母衆を佐々道に設けて之を守る兼義仲兵を帥て備前に赴く途に之を聞て大に怒り今井兼平をして之を擊たしむ兼康敗走し備中板倉河を保つ追兵至るまた敗る成澄と交々撃て水に墜つ水中に成澄の刀を引て之を殺し其の駒を奪ふと之を殺す(大日本史)。
セノヲ チウケイ 潤尾長圭 江戸の醫家、
自得軒と號す、安永二年二月歿す(江戸名家墓所一覽)。江戸の醫家、

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。
セノヲ チウケイ 潤尾長圭 江戸の醫家、
自得軒と號す、安永二年二月歿す(江戸名家墓所一覽)。

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に

通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に

通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に

通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に

通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に

通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。

セノヲ リウサウ 妹尾柳齋 古錢家、大阪の
人、泉諦及び世寶錄を著はす享保年間の人名手なり(工藝志料)

セミマル 施平 高僧、才氣済明にして深く法相に

通ず大和の元興寺の住持たり天長四年淳和天皇薬師佛の像を造り蓮華曼荼羅を金書し宮中に會な設けて供養説法を講じて數人を斬り遂に爲めに殺さる(大日本史)。

保十九年五月十二日寂す年五十四(池坊系譜)

センカ 遥覺 高僧、俗姓王生氏、豐後の人、

膽勇人に過ぐ嘗て盜を爲す一旦驟然自ら改め髪を削りて桑門となり庵を安部山に結び病く前非を悔い勤て佛法を脩す衣僅かに形を蔽ひ食糞に命を繕ぐのみ閑遊の律を究め顯密の學を研ぐ遂に一大德僧となる暮年微恙に罹り衆僧をして佛號を唱へしめ自ら彌陀の像を営んで自薦くも放たず時を移して乃ち絶す時に保延六年なり年九十一

造命して佛堂の下に埋めしむ今に至るまで肉身尚乎存す

セ云ふ(東國高僧傳)

センカク 仙覺 歌人、其の姓系郷里を詳らかに

信をして佛號を唱へしめ自ら彌陀の像を営んで自薦くも放たず時を移して乃ち絶す時に保延六年なり年九十一

造命して佛堂の下に埋めしむ今に至るまで肉身尚乎存す

セ云ふ(東國高僧傳)

センカ 仙覺 歌人、其の姓系郷里を詳らかに

信をして佛號を唱へしめ自ら彌陀の像を営んで自薦くも放たず時を移して乃ち絶す時に保延六年なり年九十一

造命して佛堂の下に埋めしむ今に至るまで肉身尚乎存す

セ云ふ(東國高僧傳)

北村季吟に學ぶ、芭蕉の主家なり

センキン 善均 神僧、山城國臨川寺の僧なり字

苑を採り飽く迄醍醐を領す故を以て草成く敬崇す弘仁

三年寂す年八十四(元亨釋書、東國高僧傳)

センキ 神喜 高僧、姓は藤原氏、平安の人、至

性あり母亡して悲戀已らず乃ち其の像を作りて室中に安

じ茶果蔬飯必ず先づ供して而る後に食ふ幼き時台山の頂

に佛あり手な舉げて之を招くと夢む七歳にして山に登り

中堂に至りて薬師佛を見るに嚴として夢に見る處の如し

十六にして出家受戒し靜所に安居して經論を翻譯する凡

そ十二年一日の如し延長中詔を奉じて宮中の講師となる

寺を集めて教授す著はす所謂林採葉鈔あり世に行はる

(大日本史)

センカ デンエフ 祢迦傳葉 祢僧、上州龍

源寺の住持なり、笑顛に龍原寺に歸して一語の下に悟る

流し來つて琉球の油添に極樂寺を云ふ寺院を建立した佛

教が琉球に入つたのは此時が始めて(古琉球)

センカ シヤウグワイ 祢鑑象外 禅高僧、

肥前の人、法を桃溪悟公に嗣ぐ宗說縱橫なり屡々諸刹に

住し後建長寺に遷る遍外一覽亭に題する偈に曰く「等し

く乾坤なる見るに兩般なし飛鳥走兎撫子を渙る徒に經頂に

牀座を施さず只貴ぶ人々向上に看んこさなぞ」晩年同契庵を山中に構へ印を解きて休す文和四年冬十月十八日化す火葬するに及び眼根壞せず且舍利を出すこと若干粒、

府下の道俗未曾有と歎す朝廷敕して妙覺禪師と號す(本朝高僧傳)

センカ 善議 高僧、俗姓慧賀、河内錦織郡の人、

初め大安寺の道慈法師に從ひて三輪の學を受け盡く其の

北村季吟に學ぶ、芭蕉の主家なり

センキン 善均 神僧、山城國臨川寺の僧なり字

苑を採り飽く迄醍醐を領す故を以て草成く敬崇す弘仁

三年寂す年八十四(元亨釋書、東國高僧傳)

センキ 神喜 高僧、姓は藤原氏、平安の人、至

性あり母亡して悲戀已らず乃ち其の像を作りて室中に安

じ茶果蔬飯必ず先づ供して而る後に食ふ幼き時台山の頂

に佛あり手な舉げて之を招くと夢む七歳にして山に登り

中堂に至りて薬師佛を見るに嚴として夢に見る處の如し

十六にして出家受戒し靜所に安居して經論を翻譯する凡

そ十二年一日の如し延長中詔を奉じて宮中の講師となる

寺を集めて教授す著はす所謂林採葉鈔あり世に行はる

(大日本史)

センカ デンエフ 祢迦傳葉 祢僧、上州龍

源寺の住持なり、笑顛に龍原寺に歸して一語の下に悟る

流し來つて琉球の油添に極樂寺を云ふ寺院を建立した佛

教が琉球に入つたのは此時が始めて(古琉球)

センカ シヤウグワイ 祢鑑象外 禅高僧、

肥前の人、法を桃溪悟公に嗣ぐ宗說縱橫なり屡々諸刹に

住し後建長寺に遷る遍外一覽亭に題する偈に曰く「等し

く乾坤なる見るに兩般なし飛鳥走兎撫子を渙る徒に經頂に

牀座を施さず只貴ぶ人々向上に看んこさなぞ」晩年同契庵を山中に構へ印を解きて休す文和四年冬十月十八日化す火葬するに及び眼根壞せず且舍利を出すこと若干粒、

府下の道俗未曾有と歎す朝廷敕して妙覺禪師と號す(本朝高僧傳)

センカ 善議 高僧、俗姓慧賀、河内錦織郡の人、

初め大安寺の道慈法師に從ひて三輪の學を受け盡く其の

北村季吟に學ぶ、芭蕉の主家なり

センキン 善均 神僧、山城國臨川寺の僧なり字

苑を採り飽く迄醍醐を領す故を以て草成く敬崇す弘仁

三年寂す年八十四(元亨釋書、東國高僧傳)

センキ 神喜 高僧、姓は藤原氏、平安の人、至

センケ

センケ—センコ

センコ

一四〇六

センケ タカヒコ 千家尊孫 國學者、出雲國造導之の嫡男、天保三年出雲大社御社代兼國造職を襲ぎ明治二年老を告ぐ千家瀬造家には古来懸退せしこと無かりしも大政維新に付參朝すべきに際し齡七十餘年に及ぶな以て官に請ひて職を尊澄に譲れり同五年歸歿年八十、歌學に長じ比奈の歌語、眞理集、自點眞理集、八雲歌集等の著書あり香川景樹、加納諸平、石川依平等と書翰の往復なし専ら歌道の振興を計れり其の詠歌は世人の稱讃するもの多しと云ふまた園藝に熱心にして栽培の事に精通し餘暇ある毎に國園を造遼し之が爲めに健康持續に裨益せしこと少からず出雲國內に歌道の振興せしは一に其の指導に基けり

センケ タカムネ 千家孝宗 出雲國造、千家氏の祖、父孝時三子あり長を清孝と云ふ多病なり次日命より出す命選を皇太神に受け永く大國主尊の祭主と云ふ孝宗と云ふ季を貞孝と云ひ北島氏と稱す後諸國の國造を廢し國司を置くに及び獨り出雲國造のみ其の稱を襲ふ而して國衙の政に關せざるなり孝時の時に至りて老て將に國造及び神主の職を貞孝に譲らんとす孝時の妻諱めて長子清孝を譲らしむ(出雲貞孝傳參照)

センケ トシノア 千家俊信 國學者、出雲國造後藤の二男、一家を分立し千家日古主と稱す、年十五にして單身伊勢の一族、人となり溫厚にして謹嚴なり當時仙石氏財政振興はす久賢家老となり勤儉事に從ふ数年ならずして府庫充實す此に於て兵政を修め學校を創む治績極て厚し久賢、伊藤東所、紀平洲等と交り善し居常勤王の志極て多し其の京都に役するや毎朝必らず紫宸殿の門前に至りて拜するを例とす末年大老に進む君民之れに頼る文化五五年歿す舉藩痛悼せざるはなし(傳記)

センケン 仙原 高僧、耕叟と號す、姓氏貫鄉元公に謁し島來りて國師に依て高職に屢任す後鎌倉に出て無學の多し本居宣長の後信に贈りたる書翰は百數十通現在に千家尊福之を保管す

センケン 仙原 千家俊信 國學者、出

雲國造後藤の二男、一家を分立し千家日古主と稱す、年十五にして單身伊勢の一族、人となり溫厚

にして謹嚴なり當時仙石氏財政振興はす久賢家老となり勤

儉事に從ふ数年ならずして府庫充實す此に於て兵政を修め學校を創む治績極て厚し久賢、伊藤東所、紀平洲等と交り善し居常勤王の志極て多し其の京都に役するや毎朝必らず紫宸殿の門前に至りて拜するを例とす末年大老に進む君民之れに頼る文化五五年歿す舉藩痛悼せざるはなし(傳記)

センゴク ヒサトシ 仙石久後 勤農家、

内蔵介と稱す、但馬出石侯仙石氏の一族、人となり溫厚にして謹嚴なり當時仙石氏財政振興はす久賢家老となり勤

儉事に從ふ数年ならずして府庫充實す此に於て兵政を修め學校を創む治績極て厚し久賢、伊藤東所、紀平洲等と交り善し居常勤王の志極て多し其の京都に役するや毎朝必らず紫宸殿の門前に至りて拜するを例とす末年大老に進む君民之れに頼る文化五五年歿す舉藩痛悼せざるはなし(傳記)

ゼンゲン 善元 畫家、その筆法牧溪の筆意を學べり而して實は周文の風格より出でて善く活動の態を得たりと云ふ(本朝畫史)

センゴク サキヤウ 仙石左京 遊臣、但馬出石の領主仙石美源守政美の臣にして父を某と云ふ千鶴の往復なし専ら歌道の振興を計れり其の詠歌は世人の稱讃するもの多しと云ふまた園藝に熱心にして栽培の事に精通し餘暇ある毎に國園を造遼し之が爲めに健康持続に裨益せしこと少からず出雲國內に歌道の振興せしは一に其の指導に基けり

センゴク サキヤウ 仙石左京 遊臣、但馬出石の領主仙石美源守政美の臣にして父を某と云ふ千鶴の往復なし専ら歌道の振興を計れり其の詠歌は世人の稱讃するもの多しと云ふまた園藝に熱心にして栽培の事に精通し餘暇ある毎に國園を造遼し之が爲めに健康持続に裨益せしこと少からず出雲國內に歌道の振興せしは一に其の指導に基けり

ゼンゲン 善元 畫家、その筆法牧溪の筆意を學べり而して實は周文の風格より出でて善く活動の態を得たりと云ふ(本朝畫史)

センゴク サキヤウ 仙石左京 遊臣、但馬出石の領主仙石美源守政美の臣にして父を某と云ふ千鶴の往復なし専ら歌道の振興を計れり其の詠歌は世人の稱讃するもの多しと云ふまた園藝に熱心にして栽培の事に精通し餘暇ある毎に國園を造遼し之が爲めに健康持続に裨益せしこと少からず出雲國內に歌道の振興せしは一に其の指導に基けり

センコク ムラヨシ 仙石村吉 仙石秀久

(古今狂歌人物誌)

センシ 千枝 畫家、未だ其の姓氏を詳にせず飛

鳥部常則と時代を同くして共に能画を以て一世に鳴る

云ふ本朝畫史

の臣、森村春の弟、阿波の人、幼稱左馬進、長じて石見と改め後九郎左衛門と改む天正十年仙石秀久に從つて讃岐を攻め明年また從つて屋島を攻む改めて仙石筑後守と稱す秀久信濃の小諸を領するに及び七千石を領す長子村重、次は久村あり(阿波志)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發刊す蓋し開新社の名を存するにあり自ら和歌國文の編輯を督す、後有喜世新聞に入りまた遷り開化新聞の記述に從事し後も明治、年開化新聞を發行せしが資足らずして半途に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

て通稱となす、十世孫五郎全了に至り文化年間土風爐を作の餘暇を以て始て磁器を造り和漢の古器を其上に金粉を以て其巧顧る精妙に至るまた赤色釉を塗り其上に金粉を以て古代の彩紋を描くものありこれは明の永樂年間に製し所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

て通稱となす、十世孫五郎全了に至り文化年間土風爐を作の餘暇を以て始て磁器を造り和漢の古器を其上に金粉を以て其巧顧る精妙に至るまた赤色釉を塗り其上に金粉を以て古代の彩紋を描くものありこれは明の永樂年間に製し所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し、明治の初年外人の聘に應じ假名新聞の編輯者たり是より先き淺草庵齋側の後裔黒川真頼の處に依りて牛込に廬し後幾ばくもなく開新社を興し風雅誌を發行せし所の磯器に金禰秋と稱するものに本づきたるものなり

紀伊國主徳川齊頤極めて之を愛し永樂の印を賞す爾來永樂な以て氏となし且以て磯器の名となし永樂金禰秋といふ了全の子保五郎保全といふ今に至るまでその名聲を

鹽さず(工藝志料)

セントラル・サウス

セントラル・サウス

セントラル・サウス

く仙林に從て學び出でて能州の總持寺を主り青蓮寺に遷る伯州の牧某氏安泰、東昌の二刹を創め皆虎を請じて第一世となす(日本洞上聯燈錄)

センゴウ シウガノ 全虎嘯巖 禅僧、久し

西井上文雄の門に入り國學を修む事は古今集の體を慕ひて秀詠多し

センジュン 専順 索人、平安六角堂跡之坊に居り法橋に親せらる立花の宗本源なり連歌を好み心散法印を友として頻りに修して能く徳終に一家なして世に稱譽せらる文明天四年始めて瓶華を立華、砂の物、生花の三種に分ち美名傳、荷巻傳二冊を著はず延徳元年歿す年七十二(鑑定便賛、池坊系譜)

センシヨ テンアン 禅暎天庵 禅僧、俗姓源、能州の人、初め童子を以て洞谷寺(能州に在り)の明峯和尚に從ふ祝娶受具の後無事に依り朝夕接待し遂に其の旨を領す後に洞谷に出售し再び諸寺(また能州に在り)に轉ず晩に事を謝して加州の開福寺に退居して残す(日本洞上聯燈錄)

ゼンシラウ 善四郎 陶工、宣政年間の人、出雲松江の藩主松平治郷致仕して不昧と號す、深く點茶を好み一家の茶式を定む治郷茶器の好醜を鑑定するに善四郎に命じて茶器を作らしむ善四郎は高麗の諸器を摸造するに巧みなり惜不群の意匠を用ふ其の製甚だ佳なり世に稱して出雲燒といふものなり(工藝志料)

センセイモンキン 宣政門院 伊勢齋官、後醍醐天皇の第二皇女、御母は後宮極院なり元應元年六月内親王となり十月一日に叙せられ天德二年十二月慶宮にト定され同三年正月三宮に准す元弘元年伊勢神宮に退下、建武二年二月院號宣下より慶三年五月五日出家す正十七年(貞治元年)五月七日崩す(女院小傳)

センリウエキ 千宗易 茶人、利休と號す、初字は與四郎、族を田中と稱す、其の先は室町幕府に仕鷗に傳へ紅鸞之を宗易に傳へ道耳之を宗悟に傳へ族稱と云ふ宗易哉

珠光之を篠道耳に傳へ道耳之を宗悟に傳へ族稱と云ふ宗易哉

甫めて十七にして茶道を學ぶ蓋し茶家流に臺子傳ありて之傳(或は曰く宗易は道珍と云へる者)に從て茶を學ぶと初

月七日歿す(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗佐(七世) 茶人、吸齋と稱す、千宗佐了々齋に茶道を學びて能くす其の義子となる實は久田皓々齋の男、實母は昭和齋の女、萬延元年六月七日歿す(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗佐(七世) 茶人、利休と號す、家之の祖、千宗佐に茶道を學びて能くす其の義子とな

る實は久田皓々齋の男、實母は昭和齋の女、萬延元年六月七日歿す(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(七世) 茶人、覺々

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(三世) 茶人、覺々

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(五世) 茶人、認得

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(六世) 茶人、虛白

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(七世) 茶人、利休と號す、

家之の祖、千宗佐に茶道を學びて能くす其の義子とな

る實は久田皓々齋の男、實母は昭和齋の女、萬延元年六月七日歿す(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(八世) 茶人、當叟

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(九世) 茶人、當叟

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(十世) 茶人、當叟

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(十一世) 茶人、當叟

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

センリウシツ 千宗室(十二世) 茶人、當叟

と號し不休齋と稱す、初世宗室に茶道を學て能くせり初

め宗安と稱す、其の名子に識り父の名を嗣ぐ加州侯に仕へ後ち豫州松山侯に仕ふ寶永元年五月十四日歿す年三十二(古今茶人系譜)

治五年五月京都市上京区小川寺内今日庵に生る、十八歳にして父祖の遺業を繼ぎ東京に出で自己啓發に努力する所あり北白川、小松兩宮殿下より鐵中、圓能齋の號を賜はり、數年にして歸洛君に褒減せんとする茶道の復興に努め多くの弟子に教授し茶道興隆を圖る大正十三八年五月逝去年五十三

の祖、茶傳宗易の孫宗旦の第二子、江琴と號し堪笑軒また遼源齋と稱す、其の先人より世々茶事を以て紀伊侯に石田三成に命じて首な鉢懸に戴せ一條兵房に與すと云ふ(或は云ふ宗易資財を擰ちて花を活け茶を點じ阿彌陀堂金、鉢拂茶碗及び石燈籠を細川忠興に授け自製の茶匙及び鐵鎌茶碗を以て弟宗嚴に與へ敷き寄居の床上に歎坐し傍若無人にて腰を屈めて屢々秀吉の怒りて死を賜ふ古溪亦た爲め己の肖像を置く秀吉之を怒りて死を賜ふ古溪亦た爲め其の事をして辭せば可なりと宗佐對へ曰く君は國家の大臣に命を戴ひて花を活け茶を點じ阿彌陀堂金、鉢拂茶碗と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

センリウサ 千宗佐(初世) 茶人、千家表の祖、茶傳宗易の孫宗旦の第二子、江琴と號し堪笑軒また遼源齋と稱す、其の先人より世々茶事を以て紀伊侯に石田三成に命じて首な鉢懸に戴せ一條兵房に與すと云ふ(或は云ふ宗易の子讀書を好み伊藤東涯に從ひて業を受く宗旦の子翁園指出して其の首を舟岡山に掲棄せんとする茶道の復興に宗守居士とあり(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、讃州高松侯に仕ふ延寶三年十二月十九日歿す年八十三、碑面に一翁宗守居士とあり(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

の祖、茶傳宗易の孫宗旦の第二子、江琴と號し堪笑軒また遼源齋と稱す、其の先人より世々茶事を以て紀伊侯に石田三成に命じて首な鉢懸に戴せ一條兵房に與すと云ふ(或は云ふ宗易の子讀書を好み伊藤東涯に從ひて業を受く宗旦の子翁園指出して其の首を舟岡山に掲棄せんとする茶道の復興に宗守居士とあり(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

事へ京都に家す宗易造くる所の茶室不審庵に住すと云ふ者小路の別宅に住す似休齋又官休庵と稱す、翁叟の二男、父に茶道を學びと云ふ茶室に於て陽はると(二子あり長を道安と云ひ次を少庵と云ふ茶人(茶人系譜全集、茶事談)

セニニヨ 宣如 漢宗の僧、本願寺第十三代、名は光從、愚溪と號す。光壽上人の第二子なり。慶長九年二月二十日生る。童名を長慶と云ひ、九條關白兼宰の猶子たり。十九年十月五日得度し、同日父光壽没するを以て直ちに宗務を繼ぐ。寛永四年十月六日僧上に任す。十六年將軍家光(京都)六條七條間の地、廿六ヶ町を加増す。承應六年、本願寺の構造を改め、大伽藍とす。退隱後、東泰院と稱し別邸涉成園に幽接す。萬治元年四月二十五日寂す。壽五十五。(門跡傳、本山寺誌)

セニニヨ 善如 真宗の僧、山城本願寺第四代、名は俊玄、第三代宗昭上人の孫にして、承應法師の子なり。正慶二年二月二日生る。童名を光慶と云ひ、九條關白兼宰の猶子たり。得度して、權大僧都に任じ。祖父宗昭上人に從ひ、宇治崇となり。文和元年就職し、康安元年宗祖一百年忌の法會を修す。康應元年二月二十九日在職三十八年にて寂す。壽五十。

(門跡傳、本山寺誌、大谷略譜)

セニバイ シヤウアン 千呆性僕 黄檗宗の僧、山城宇治萬福寺の第六代、字は千歎、彌瑞と號す。名は俊玄、山城本願寺第四代、即非如一禪師に師事し、其の法を嗣ぐ。後東転して、長崎崇福寺中興二代となり。寛文二年退隱し、三年年脚非に從ひ、宇治崇黃檗山に登る。幾ばくもなく長崎に歸り再び崇福寺に住す。天和元年國内饑饉す。千呆自己的書籍器具を賣り粥を施す。翌年益々饑饉し、饑饉に困るもの多し。千呆即ち徑五尺五寸の大釜を鑄造し、粥を施與す。元禄八年再び黃檗山に登り。翌年正月六代の山主となり。追山の式を行ふ。一年紫衣を賜はる。寶永二年二月期日寂す。壽七十。(黄檗宗史料)

(門跡傳、本山寺誌、大谷略譜)

セニバーリハウ 千羽理芳 插花家、舊大聖寺落成の用達、加賀金澤の人、その曾祖父松樂齊東傳が谷川延林の遺風を受けしより以來、世々皆插花を修む。理芳多年關本理恩に學ぶ。理恩老に及び遂に松齋の教を讓り、讓せられ家元の跡を襲ひ、加州金澤別院に於て、齊の生花會を開く。晩年東京に出て、廣く貴神の間に出入し、當時に於ては、高野山に登り實性院の夏雄阿闍梨を拜して、調養に服し、兩部の灌頂法を得たり。宿宿に質問して、義學の名著る文眞九年實性院に住す。顯密な講布して宿學の徒尙之を憚る。永正十三年五月十八日順世す。年六十三なり。(本朝高僧傳)

ゼンホク テンシツ 禅昧天室 禅昧、上総の人、州の三途臺に依り剃髮す。武州龍福寺の節菴禪師法化甚だ盛なりと聞き、往て謁す。華大に之を器とし親炙すること数年。遂に其の旨を得たり。華の退席するに及びて衆請ひて本寺に住せしむ。天正丁丑移て最乘寺を領す。居るここと兩年に及て復た龍福に歸る。天正甲申八月二日寂す。

(日本洞上聯燈錄、元亨釋書)

ゼンムキ 善無畏 善法平文師。(一に禪法に作る) 花園天皇の時の人、正和四年四月朝命を奉じて近江國日吉神社の造営に從事せり。當時の名手なり。(工藝史料)

ゼンミヤウ 仙命 高僧、丹波の人、幼にして台山の無動寺に上り止觀を學ぶ。兼ねて淨業を脩す。嘗て聖像に對して指燈を燃す。れば青龍形を現はす。感じに足指を燃す。れど空中に詠嘆の聲を聞く。嘉保中預め死期を衆に告げ西に向て寂す。年八十三。(元亨釋書、東國高僧傳)

ゼンムキノンキ 宣陽門院 後白河天皇の第六女、御母は從二位高階榮子(丹後局)相模守平業房の妻。養和元年十月五日生る。文治三年八月著縷、同五年十二月内親王となり。尋て三宮に准せられ建久二年六月

郎左衛門吉田邸に隠む而して姫已に自盡す。是に於て刑を免れ。連枝の列墓傳院に葬る。を得たり。と眞鶴詳ならず。千姫竹橋御殿と云ひ天壽院と稱す。(坂崎出羽守參照)

ゼンベン 仟遍 高僧、幼にして諸方を巡遊し真言教を慕ふ。年廿四にして高野山に登り實性院の夏雄阿闍梨を拜して調養に服し、兩部の灌頂法を得たり。宿宿に質問して、義學の名著る文眞九年實性院に住す。顯密な講布して宿學の徒尙之を憚る。永正十三年五月十八日順世す。年六十三なり。(本朝高僧傳)

ゼンボフ 善法 平文師。(一に禪法に作る) 花園天皇の時の人、正和四年四月朝命を奉じて近江國日吉神社の造営に從事せり。當時の名手なり。(工藝史料)

ゼンホク テンシツ 禅昧天室 禅昧、上総の人、州の三途臺に依り剃髮す。武州龍福寺の節菴禪師法化甚だ盛なりと聞き、往て謁す。華大に之を器とし親炙すること数年。遂に其の旨を得たり。華の退席するに及びて衆請ひて本寺に住せしむ。天正丁丑移て最乘寺を領す。居るここと兩年に及て復た龍福に歸る。天正甲申八月二日寂す。

(日本洞上聯燈錄、元亨釋書)

ゼンムキ 善無畏 善法平文師。(一に禪法に作る) 花園天皇の時の人、正和四年四月朝命を奉じて近江國日吉神社の造営に從事せり。當時の名手なり。(工藝史料)

ゼンミヤウ 仙命 高僧、丹波の人、幼にして台山の無動寺に上り止觀を學ぶ。兼ねて淨業を脩す。嘗て聖像に對して指燈を燃す。れば青龍形を現はす。感じに足指を燃す。れど空中に詠嘆の聲を聞く。嘉保中預め死期を衆に告げ西に向て寂す。年八十三。(元亨釋書、東國高僧傳)

ゼンムキノンキ 宣陽門院 後白河天皇の第六女、御母は從二位高階榮子(丹後局)相模守平業房の妻。養和元年十月五日生る。文治三年八月著縷、同五年十二月内親王となり。尋て三宮に准せられ建久二年六月

に作る)名は貞字は恒輔。必東は其の號、浪華の人、幼より慕ひ好み四方に周遊して、其の技を研ぎ、後沈南蘋の畫法を學んで之を能く。セニヒツトウ 泉必東

は、元應元年十二月十日没す。(畫業要略)

セニヒメ 千姫 德川家康の孫、秀忠の長女、落城の時祖父家康之を殺すに忍びず。救ひて之を出さんと欲し。麾下の士に告げて曰く「何人を論ぜず千姫を救ひ出さん」と。家康曰く「諸に往けと出羽槍を拂ひ敵を排し炎煙を冒す。千姫を賜はるを得ば死を賜して城に入り姫を救出さんと。」

慶長十二年年十一歳にして、豊臣秀賴に嫁す。元和元年大阪

に城の時祖父家康之を殺すに忍びず。救ひて之を出さんと欲し。麾下の士に告げて曰く「何人を論ぜず千姫を救ひ出さん」と。家康曰く「諸に往けと出羽槍を拂ひ敵を排し炎煙を冒す。千姫を賜はるを得ば死を賜して城に入り姫を救出さんと。」

と。家康曰く「諸に往けと出羽槍を拂ひ敵を排し炎煙を冒す。千姫を賜はるを得ば死を賜して城に入り姫を救出さんと。」

の旗下を召し告げて曰く「千姫の娘儀は風聞のみ若し、實なに作る。」名は貞字は恒輔。必東は其の號、浪華の人、幼より慕ひ好み四方に周遊して、其の技を研ぎ、後沈南蘋の畫法を學んで之を能く。セニヒツトウ 泉必東の號は、元應元年十二月十日没す。(畫業要略)

任風舎と號す、明治廿四年十月一日歿す年七十三

センリウティ カラマル 千柳亭唐丸

狂歌師、奥州仙臺侯の醫官にして名は弘景、字は子徳、通稱を節休といふ、其先は清和天皇の裔孫近江國の住人錦綱判官義弘より出で世々錦綱を氏とす、六勿園、千柳亭、また一体が髑髏の戯れより出で悟容人といふ戯號あり、又乳の下に相對して大なる黒子あるを以て雙星子とも稱せり、猶朝三寧、茅山人等の數號ありて文治年中より連綿として醫を業とす狂歌を好み少々三院羅教師の門に入る弟唐丸と云ふ後に文泉舍始業といふ者に唐丸の名を譲りて師翁の初名を織ぎ一葉と改む後又之を千菊園千條といふ者に譲り天保の初年千葉有功卿より「ことの葉の高機たて織いだせぬも錦も已がまに／＼」といふ歌に添て綾彦といふ名を賜れりといふ元治元年五月五日歿す年七十二、仙臺八ツ塚林松院に葬る(古今狂歌史)

セヤタラヒメ 勢夜多良姫 濑谷桐齋 三島溝穂耳の女、攝津國島下郡三島に濱咲社あり之に祀るの一名は勢夜佐多良比賣又の名は玉櫛姫又の名は瀬川姫と云ふ大物主神と婚して姫跡禰伊須氣依姫、五十鈴依姫、天日方奇

日方命を生む(古事記 大倭神社註 追狀 古事記)

セヤドウサイ 漣谷桐齋 國學者、秋田藩士、名は晉、又勝明、字は子順、桐齋は其の號にして程野、翠雨齋ともいひ通稱を小太郎といふ實性頗敏博學宏才にして算數の學にも通じて尤甚なり著校明德館解、孟子解、左傳解、國語、尚書解、荀子解、國策解等あり天保四年二月卒す年六十一

セヤマ 力ネ 世家眞かね 舞踊の醜匠 楠木店勘十郎の門人にして歿後世家眞の藝術の絶えたるを起す其の實姉藤間よし歿して楠木店藤間氏の家名絶えたるに及び其の家系を預り藤間かねと號す明治廿五年八月廿七日歿す年六十一

セラ シウサウ 世良修藏 勵王家、長藩の士名は祇徳明治元年二月朝廷東北の朝敵を討す總督九條道孝、副總督澤爲量にして參謀は福岡忠敬、大山綱良、世

良修藏なり道を別て會津を征す後藏城福島に次す巳に任風舎と號す、明治廿四年十月一日歿す年七十三狂歌師、奥州仙臺侯の醫官にして名は弘景、字は子徳、通稱を節休といふ、其先は清和天皇の裔孫近江國の住人錦綱判官義弘より出で世々錦綱を氏とす、六勿園、千柳亭、また一体が髑髏の戯れより出で悟容人といふ戯號あり、又乳の下に相對して大なる黒子あるを以て雙星子とも稱せり、猶朝三寧、茅山人等の數號ありて文治年中より連綿として醫を業とす狂歌を好み少々三院羅教師の門に入る弟唐丸と云ふ後に文泉舍始業といふ者に唐丸の名を譲りて師翁の初名を織ぎ一葉と改む後又之を千菊園千條といふ者に譲り天保の初年千葉有功卿より「ことの葉の高機たて織いだせぬも錦も已がまに／＼」といふ歌に添て綾彦といふ名を賜れりといふ元治元年五月五日歿す年七十二、仙臺八ツ塚林松院に葬る(古今狂歌史)

セヤタラヒメ 勢夜多良姫 濑谷桐齋 三島溝穂耳の女、攝津國島下郡三島に濱咲社あり之に祀るの一名は勢夜佐多良比賣又の名は玉櫛姫又の名は瀬川姫と云ふ大物主神と婚して姫跡禰伊須氣依姫、五十鈴依姫、天日方奇

日方命を生む(古事記 大倭神社註 追狀 古事記)

セヤドウサイ 漣谷桐齋 國學者、秋田藩士、名は晉、又勝明、字は子順、桐齋は其の號にして程野、翠雨齋ともいひ通稱を小太郎といふ實性頗敏博學宏才にして算數の學にも通じて尤甚なり著校明德館解、孟子解、左傳解、國語、尚書解、荀子解、國策解等あり天保四年二月卒す年六十一

セヤマ 力ネ 世家眞かね 舞踊の醜匠 楠木店勘十郎の門人にして歿後世家眞の藝術の絶えたるを起す其の實姉藤間よし歿して楠木店藤間氏の家名絶えたるに及び其の家系を預り藤間かねと號す明治廿五年八月廿七日歿す年六十一

セラ シウサウ 世良修藏 勵王家、長藩の士名は祇徳明治元年二月朝廷東北の朝敵を討す總督九條道孝、副總督澤爲量にして參謀は福岡忠敬、大山綱良、世

ソ之部

リアン レウダウ 素安了堂 謙僧、筑前

博多の人、年十三同原本公を州の保寧寺に禮して削髮受戒す從學久うして忽悟る處あり去て相模の圓覺寺の西禪和尚に謁す時常に衆に對て之を稱す東明日和尚建長寺を薦すや安を越て第一座に居らしむ名鑑林に著はる昌山清其德を慕ひ弟子の禮を執る法泉寺を建てて開山祖となすまた吉祥寺を伊豆に創して第一世となす越前・権越・長禪寺を開き、安を延く後諸山の遷に應じ東勝・壽福・建長の三大寺に遷し到る處施與一・私せす悉く終補に入りて天目山の中峰禪師に參して勤行すること十年、密自讐の頂相を與ふ延祐丙辰天目山を離れ我正和五年を以て筑紫の冷泉津に着く時に僧來て母氏の喪を告ぐ雄僧傳)

ソイク エンケイ 祖雄遠溪 禅僧、丹波

冰上郡佐治の莊藤原光基の子、幼りたる時より識量衆に踰ゆ年稍長じて既に遜世の意あり前年に古松の盤屈して蒲輪の如きものあり雄常に其上に趺跡す父其駿逸に熟練するべしと雄曰く和尚既に尊し何ぞ遠て出家せしむ年十九、一山寺にて投じ落髮して戒を受く出でて諸種を應付し德治元年元に入りて天目山の中峰禪師に參して勤行すること十年、密に心印並に禪門の戒法を得たり一時夢らく日本丹波の一山形目に似たりに得石あり難音大士の像を安らずと

乃ち筑前の大巣穴に棲て十餘歳を経て後故郷に還り一處を卜定す宛も夢みし所の如し茅を結び裏坐す四方の禪侶山溪を過ぎて至る漸く築庵となる瑞巖源高源寺といふ名を述ぶ延祐乙未年五月十九、門弟子陶器を以て全身を奉じて松樹の下に葬り字を榮きて靈光といふ(本朝高僧傳)

ソイク ホウヲウ 祖一峯翁 禅僧、家居して書を読み學内外に涉る年廿四にして教外の宗を慕ひ

ソイク ホウヲウ 祖一峯翁 禅僧、家居して書を読み學内外に涉る年廿四にして教外の宗を慕ひ

ソイク ホウヲウ 祖一峯翁 禅僧、家居して書を読み學内外に涉る年廿四にして教外の宗を慕ひ

ソウア ソウイ

ソウイ

ソウイ

正六位勳六等に叙せらる此年日清事を拂ふるや七月佐世保を發し二十日豊島海戰に參與して爾來陸軍の護送山東角及び東高角附近の偵察圓口及び車光旭日

州の牽制砲撃より遂に臺灣劉公島の砲撃に及び二十八年十一月二十日威海衛にて敵艦康濟を捕獲したり和成り凱旋して後戰功を以て功四級に叙し金威勳章及び車光旭日修蔵が效糧金潭屋に在るを覗ひ之を聞ひ遠藤條之助、赤坂幸太夫二人其の寢室に闖入す修蔵妙な擁して訴を容れ大兵の東下を待て之を破すべし因て明日余西上して大總督府に聞すべしとの意を述ぶ衆に怒る閏月十九日仙臺藩の將監禁姓齒武之進をして修蔵を捕へしむ

みその書を受けて仙臺藩に呈す之を見るに中に仙米二藩とす福島の藩主鉢木六太郎に托し密使に托せんことを誇ひ因て戒めて曰く仙臺藩に知らしむる勿れと六太郎之を怪笑りて譲りて師翁の初名を織ぎ一葉と改む後又之を千菊園千條といふ者に譲り天保の初年千葉有功卿より「ことの葉の高機たて織いだせぬも錦も已がまに／＼」といふ歌に添て綾彦といふ名を賜れりといふ元治元年五月五日歿す年七十二、仙臺八ツ塚林松院に葬る(古今狂歌史)

セラシセラタ

セリタセワキ

セリタセワキ

セラシセラタ

セリタセ

ソウキ

て拂子を作りて京に鬻がんと宗祇慨然として和歌を賦して曰く「我がために拂子ばかりは免せかし塵の浮世な棄てはつるまで」と賊懲悟悔謝して悉く其腰ふ所なを還し且つ山中を逃り出して他處に備へ卒ひに苦なきを得たり是れ以て其の平生を概見するに足りり宗祇兼て茶法に通すまた畫を善くせり者には所筑波集、吾妻問答、筑紫道記あり筑波集は勤む奉じて撰する所なり(事實文編、野史)

ソウキ 増基 実相院の僧正、圓光院關白基忠の子、覺助親王に從て瀧頂す、元亨四年四月廿八日寺長更に任ぜられ花園、後醍醐、光嚴、光明、崇光五代の護持僧たり後實院と號す(實相院門跡傳)

七十一、官大僧正至る(實相院門跡傳)

ソウキ ケンサン 崇喜見山 神僧、上野

の人、久しく佛光に參して大事を了す解して粉邑に歸る、

光嚴を付して印可す再び宋國に入て宗匠に請益して朝

す首め相模の淨智寺に住し後洛の南禪寺に遷る聲名輩下に喧し後一條天皇召して禪要を問ふ特に佛宗禪師の號を賜ふ印を解けて東に歸り常陸の三會寺を開て四方來學の徒を引接すまた檀信の招聘に應じ信濃の興禪寺を開きて第一代となす元亨三年六月八日金峰山の正組庵中に化す(本朝高僧傳)

ソウキ コジ 總歸居士 下野の隱者、慶長十

六年家康廢を河越に放ち新莊直賴に謂て曰く聞く下總海上色に一隱者あり涼井にして貰らす一瓢を簞下に掛け海人の錢を受けて以て旦夕の殻に貰つと彼は三好氏の族なり往年爾が父攝州江口に戰死す想ふ彼れ能く其の事な知らん且つ往物色せよと直賴命を受け海上に往て其の責め一草庵を得中に更あり年七十餘、即ち總持居士な

り且つ法華經を誦す直賴庭に入る叟之を座に延き談じて江口の戰、新莊氏首を授くるの事に及ぶ直賴遽然として涙を流して曰く所謂新庄直昌は余の父なりと居士之を開き驚慨す直賴その名を聞ふに答へず直賴曰く余聞く江口の戰に全勝を乘り士卒を指揮する者は誰なりや曰く即ち吾なりと言ひて終に其の姓字を告げず直賴還りて具さに其の狀を言ふ家康之を異なりとす(野史)

ソウキ シュンボ 宗熙春浦 神僧、大德

寺に住す俗姓は源氏、播磨赤松郡の人、幼にして業を東

ソウキ

ソウクー・ソウケ

一四二〇

山の乾心禪師に受け十八歳薦髮受具して藏鏡を司どる精長じて大德寺養叟和尚に參して省あり遂にその衣法を捐せられ命により雲門祖塔を守る養叟の寂後洛東大蔵庵に居り寛政二年大德寺に出て初め足利義満洛東に妙雲院を建てその女、通玄寺の尼す英鉄旨を承けて顔を養徳と改め宗熙請せられて主となり後、寺基を城北に移す應仁の亂起るに及び紫野兵火に罹りしな以て亂を避けて攝津福寺和泉陽泰庵に留まり居ること八年、旨よりて再び龍寶山を董し火後の廢を興す文明十三年伏見に清水寺御門天皇その徳望を聞きて終焉の計をなす、後

と書し終りて寂す壽七十九(延寶傳燈錄)

ソウキフ 宗吸 神人(一)に宗及に作る(泉州辨

津福寺和泉陽泰庵に留まり居ること八年、旨よりて再

び龍寶山を董し火後の廢を興す文明十三年伏見に清水寺御門天皇その徳望を聞きて終焉の計をなす、後

と改め宗熙請せられて主となり後、寺基を城北に移す應

仁の亂起るに及び紫野兵火に罹りしな以て亂を避けて攝

ソウル

ソウミー・ソウモ

ソウモ—ソウヨ

一四二八

七歳の時刀を磨する人を見て問うて曰く快利ならざる所
に却て快利なるあり子これを知るかと其の人知ることな
し驚き歎す年十一父母因縁あるを以て圓教寺に投じて戒
信律師に付す未だ幾ばくならずして台宗の奥祕悉く心府
に納む達磨の禪を慕うて馳求する心切なり高峰禪師に萬
壽に謁して機語相契ひ遂に衣を易へて親附す偶々僧の百
丈の語を讀もん聞き靈光獨耀迦趺ニ根塵、體露真常不レ拘
文字」といふに至つて蔚然として省ることあり高峰乃ち
これを肯可す嘉元乙巳の秋大應國師詔を奉じて筑紫より
來り洛の韜光庵に館す宗峰徑に至て請問す大應萬壽の請
を受け宗峰隨て參仕す大應雲門の關の字を看せしむ宗峰
屢語を下す大應許さすして曰く汝よく精彩を著けよ他日
別に須らく生涯あるべし宗峰憤惱精究す德治丁未の年大
應相模の建長寺に住す宗峰また隨ひ侍す未だ旬日を經ざ
るに案上に鑰鎖を放任するに當て忽然大悟し滿背汗流る
急に方丈に趨き聲を抗て曰く即今和尚と趣きを同うせり
と大應忻然として曰く嘗昔の夜夢む雲門大師光貢を垂る
と豈偶然ならんや宗峰耳を掩うて出づ翌日二偈を呈す大
應便ち其の後に書して曰く爾既に明投暗合す吾宗爾に到
て大に世に興らんこれ二十年長養して然る後に人をして
吾證明あることを知らしめよ宗峰時に年二十六、延慶戊
申の年大應寂すそれより都に回り洛東の雲居寺に逸居す
年城北紫野に抵て小院を構て居る釐下の縞白參問するも
の多し法印玄慧といふものあり博く内外に通す元亮宮論
の後宗峰に歸櫛し屢々來つて參禪し粗々造詣あり因て私
宅を捨てて爲めに方丈を建つまた都人宗印といふ者あり
素と富家なり自から化主となり諸の堂宇を營み鬱として
禪刹と成る傍して龍寶山大德寺といふ貴紳高官衣を攝け
香を捧て會に歸し風を挹む花園上皇宗峰の道義を聞き詔
して宮に入る上皇僧伽黎を著けて對坐し玄談時を移し觀
感斜ならず特に興禪大燈國師の號を賜ふ後醍醐帝恩寵益
益渥し宗峰因りて法語一篇を進む上もまた偈を賜うて曰
く「二十年來辛苦人、迎春不レ換舊風烟、著衣喫飯恁麼
去、大地那曾有一塵」こまた高照正燈國師と加賜し并に縗
帛を賚ふ重ねて敕して大德寺を擧げて南禪上刹に相並で
祝聖の道場となす仍て莊田若干畝を給して以て香積に充
つ建武四年冬疾を得臘月廿一日の夜諸弟子に遺誠して曰

く我滅後火化して骨石を丈室に置き別に塔を造ること勿れと翌日午時遺偈を書して而して逝く年五十六、法臘三十四、嗣法の者十五人語錄若干巻夜話記一巻あり世に行はる貞享三年聖旨を以て大慈雲匡眞國師と加謚す（本朝高僧傳）

リウミヤウ 増命 天台山の座主、平安の人、朝散大夫桑原安峰の子、台山の延最に師事し講席に臨む毎に文詞爛發年十六にして大戒を受く客來れば少長となく皆之に接するに禮を以てす疾む者あれば鉢飯を與ふ圓珍座主に從つて三部の瀧頂を得偶々西塔の釋迦院に坐更す院の南に大巖あり形躰の如し居るもの多く天凶す命巖前に呪すること七日、忽ち白晝に雷起りて巖即ち崩潰す右大臣源光自ら生壽五十九に終らんを知り年を延ばさんと欲す因つて命に請ひて佛事を脩せしむ此の如くすること二次皆な證驗あり延長元年菅相丞の神靈奮激して皇城を震動す太子之に死す上大に恐れ命に詔して宮に入らしむ凡そ百餘日侍臣多く神兵宮闈に列すると夢む延喜五年寛平上皇台山に幸きし命に從て密瀧を受け阿闍梨の位を授け手から袈裟、香爐、御衣等を賜ふ後また座主僧正に通じむ延長五年寂す年八十五、謚して靜觀と曰ふ（元亨釋書、東國高僧傳）

リウメイモンキン 崇明門院 徒醸翻天皇の皇子、邦良親王の妃、祺子内親王と云ふ後宇多天皇の第二皇女に生る御母は掟子女王なり元應元年十月内親王宣下、皇太子邦良親王の妃となり給ひしが正中三年皇子薨去後尼となる元弘元年十月三宮に准じ尋いで院號宣下、三年一度門院職を止められしが延元三年四月復せらる（女院小傳、皇胤紹運錄）

リウモリアキラ 宗盛明 封馬守護、助四都、洪茶丘及び高麗の將金方慶等兵を率ゐて對馬國を侵す國兵之を討ち退く弘安四年五月又范文虎等兵十餘萬を率ゐて壹岐對馬及び筑前を侵す盛明討つて功あり（寛政重修諸家譜）

リウモリカズ 宗盛員 醫家、寛喜中右衛門の醫師となる同族宗繼、左兵衛の醫師となる（泉國名醫傳）

リウ モリナホ 宗盛直 南朝の武將、通稱右馬太郎、右馬頭盛國の庶長子にして筑前宗像城に生る母は別室諸方氏の出、茂近、新六皆庶子なり、經茂、頼義を拉して肥前に奔り菊池肥後守武光に仕ふ後北朝諸將と筑前味坂に戦ひて死す時に年七十一、其の子孫四代悉く南朝の爲めに忠烈なる戦死を遂ぐ(對馬人物誌)

リウ モリヒロ 宗盛弘 對馬豊崎の郡主、永正七年四月藩主宗義盛の命を受け兵三百を率みて朝鮮を伐つ盛弘兵船を琴浦より發す是より先き大内氏の使船朝鮮に到り國王殿使と稱す朝鮮辭するに對馬の引なきを以てす使者言ふ大内氏は鎮西の都督對馬は其の管下のみ何ぞ彼が文引を取らん朝鮮其の使を納る義盛の使者至るに及んで朝鮮受けす義盛大に怒り乃ち盛弘をして之を伐たしむ盛弘、島人の三浦に在る者と攻めて齊浦の熊川城を抜き僉使李友曾を斬り逃んで防禦使柳轉年、黃衡等と戰ひ兵皆な之れに死す鮮人の死者萬を以て數ふ六月盛弘を高崎に祀り高崎大明神と號す是れより朝鮮の通交絶ゆ(對馬人物誌)

リウヨウ 増譽 近江延暦寺(天台宗)の座主、祖大納言藤原經輔の子、幼にして佛に歸し圓城寺行觀僧正に師事して得度す昔く聖跡を巡り呪練難行して神感あり三井の千光院及び洛東の聖護院を建て熊野神を勸請す應德元年秋中宮賢子崩す白河帝、増譽を召して法華實相の深旨を聞き敕して法印に任す寛治三年三井の覺圓の譲りを受けて法務となる五月勅を受けて神泉苑に孔雀經法を修して雨を禱る、八年秋累進して天王寺の主、権僧正、廣隆寺の司、圓城寺の長吏となり康和三年春白河上皇、鳥羽院に論議を開き師に命じて證議者たらしむ翌年正僧正に轉じ三山の檢校を主どる、此職増譽より始まるなりまた洛北の一條寺に住し長治二年延暦寺の座主に任す尋で大僧正に任じ尊勝、梵釋、崇福等十三寺を兼領す嘉承二年最勝會の證議者となる永久四年二月十九日寂す壽八十五(本朝高僧傳)

リウヨウ 宗用 畫家、眞相の筆寫に法りて能

く漁人を畫くまた山水あり（慶定便覽、扶桑畫人傳、本朝
書史）

ソウヨウ 僧鎔　眞宗の僧、字は子練、空華廬
と號し諱して明教院と云ふ實に祖門の一干城なり越中新
川郡市江村の民家に生る十一歳の頃路傍に水戯して在り
しな靈潭禪師通行して見る處ありけるにや強いて興中に
入れて歸る父母周章して之を尋ね往きしに早や祝髮せり
其れより専ら僧風を慕ひ偶々家に歸るも信宿せず唯墳典
に耽り十四歳にして上京せしに日溪歿後三年になりしな
生涯の遺憾なりと云はれたり昨夢師に隨ひ霖師の遺訓を
傳ふ樸師には年七八歳許劣りしが樸師も其の偉器を愛し
て生涯弟子の列に入れざりしと崇廓師、慧雲師等何れも
同門なり然れ共世舉て陳善門下の額回とぞ沙汰しける鎔
十一歳にして剃度し二十一歳にして浦山善巧寺の嗣法と
なり三十一歳にて講述し四十一歳にて侍講の命を
蒙り五十一歳にて拜官し六十一歳にて寂す僧鎔威にして
慈あり越中に暢空といふ人英邁の器なり僧鎔歿後には禪
宗になりて天下を雲遊せり最も憐れたる人なりけるにや
彼宗にて初めより薦十年を許されける老て後歸宗せられ
しが天下の老禪啓詢せざるなし皆曰く感仁兼れ持するこ
と僧鎔の如きはなし（清流紀談）

ソウ ヨシカタ 宗義方　對馬府中藩主、義
眞の四男、貞享元年府中に生る、元祿七年六月兄義倫が
請ふ旨あるにより十一月その遺領を繼ぎ義方猶幼なるに
より義眞已に致仕すと雖も朝鮮のことは義眞之を勤む可
きを命ぜらる時に十一歳、二十八日始めて將軍綱吉に謁
す此日義倫が遺物來國光の刀連漪の茶壺を献じ御台所に
飛鳥井雅親筆の古今集をまいらす九年十二月從四位下侍
従に叙任し對馬守を兼ね十四年九月義方已に成長するに
より朝鮮のことを沙汰す可しされど義眞も之を助く可し
との命を蒙る十五年三月始めて入國の暇を賜ひ八月奉書
を以て義眞が喪を尋ねらる寶永三年十二月從四位下侍
養君のことを賀さんが爲め朝鮮の譯官使對馬國に至る後
慶貢ある毎にこれを例とす六年六月家宣御代始に入國の
暇賜はり青江の刀を拜領す正徳元年四月家老の輩朝鮮人
と應接し或は信使來聘の時假に六位の裝束を著すること
を許さる七月義成が時より長刀を持たしむること中絶せ

したを朝鮮のことを勤むるにより以來在府の時も先例の如くたる可き旨恩許を被る十月朝鮮の信使を伴ひ参るにより米五百俵を賜はる二十七日義方信使を伴ひて登督す正使通政大夫趙泰億、副使通訓大夫任守幹、從事通訓大夫李邦彦、國書方物を捧げて御代替を賀す時に義方信使と登督の日のみ轍に乗ることを許さるその後三使を率ゐて登督すること三度享禮の儀節等先例を改めらるるもの多し義方其事を預り議す十一月信使に暇を賜ふ十三日義方に來國俊の刀を賜はり朝鮮來聘の例故めらるる隙心を盡して務めしことを賞せらる義方近年資財乏しきを聞召し柳川豊前調興が舊領肥前國基肆郡の内に於て千五百六十石餘の地を加へ家臣五人に時服白銀等を賜ふ是年家臣をして信使を朝鮮に送らしむ三年八月嫡子彦千代某卒するにより奉書の御尋を蒙る四年正月箕輪の別荘より出火せしにより出仕を止められ十四日許さる十五日將軍家繼より光忠の刀を享保二年七月將軍吉宗より越州國行の刀を拜領す(中略)是より先朝鮮國に產する人参、鷹、馬、虎皮、新渡の陶器並に東醫寶鑑一部を献す又彼國より漂流せしものを送り来る事凡そ六度我國より漂流のものを送り遣すこと凡百十三度或は唐船の對馬國に漂著せしものを長崎に送り遣すこと七度に及ぶ義方皆これらのことを沙汰す三年九月五日府中に卒す年三十五、眞乘寶輪大衍院と號す十月奏者番松平備前守正久をして賛銀二百枚を賜ふ(寛政重修諸家譜)

元年朝鮮國にある釜山の屋敷位置宜敷からさるを以て幕府に請ひ朝鮮と商議して草梁に移す天和元年五月將軍綱吉御代始入國の暇を賜ふにより備前吉房の刀を賜ふ二年朝鮮の正使通政大夫尹趾完、副使通訓大夫李彦綱、從事通訓大夫朴慶俊來聘し八月義眞三使を伴ひて登督す其例前の如し九月義眞を召され「此度朝鮮信使の接待心を盡して勤めしこと悦び思召す處なり元來異國通信のことは重任なれば猶ほ堀田筑前守正俊も共に諸事を圖る可し」との命を蒙る六日信使に暇を賜ひ十日稷眞に左文字の刀を賜ふ是年家臣をして信使を朝鮮に送らしむ元祿五年六月致仕し七月得物左定吉の刀及び袖挾の茶壺を献じ御台所に爲忠筆の古今集を参らす十九日刑部大輔に改む十月府中に行く暇を賜ふ義眞病者たるにより遠路の往來を慮り思召し兩三年封内に休息し參府の時は之を伺ふ可き命を蒙る七年十一月遣領を義眞が弟義方に賜ふと雖も未だ幼稚なるを以て朝鮮通使のこと義眞是を勤む可き旨仰を被る九年正月府中に行く暇を賜ふ此時我國と朝鮮との間にある處の竹島に往年より兩國の人雜居すと雖も此後は我國人の彼島に渡ることを禁ぜらる十月朝鮮の譯官使府中に来るにより其旨に達す十四年九月義方已に成長に及ぶにより朝鮮通信の事を務む可き旨鈞命あり然れども義眞猶ほ後見たる可き旨の仰を被る之より先き仰により朝鮮の人參、鷹、馬、虎、貂の皮、新渡の陶器等を奉ること六度彼國より漂流せしものを歸し遣すこと凡そ四十四度或は唐船の對馬國に著岸せしな長崎に送ること五度義眞皆之を沙汰す十五年八月七日府中に於て卒す年六十四、高嚴宗屋天龍院と號す二十三日奏者番本多彈正少弔忠晴をして贈銀二百枚を賜ふ(寛政重修諸家譜)

ソウヨ

ツウヨ

四〇

一四二九

く我滅後火化して骨石を丈室に置き別に塔を造ること勿れと翌日午時遺偈を書して而して逝く年五十六、法臘三十四、嗣法の者十五人語錄若干巻夜話記一巻あり世に行はる貞享三年聖旨を以て大慈雲匡眞國師と加謚す（本朝高僧傳）

リウミヤウ 増命 天台山の座主、平安の人、朝散大夫桑原安峰の子、台山の延最に師事し講席に臨む毎に文詞爛發年十六にして大戒を受く客來れば少長となく皆之に接するに禮を以てす疾む者あれば鉢飯を與ふ圓珍座主に從つて三部の瀧頂を得偶々西塔の釋迦院に坐更す院の南に大巖あり形躰の如し居るもの多く天凶す命巖前に呪すること七日、忽ち白晝に雷起りて巖即ち崩潰す右大臣源光自ら生壽五十九に終らんを知り年を延ばさんと欲す因つて命に請ひて佛事を脩せしむ此の如くすること二次皆な證驗あり延長元年菅相丞の神靈奮激して皇城を震動す太子之に死す上大に恐れ命に詔して宮に入らしむ凡そ百餘日侍臣多く神兵宮闈に列すると夢む延喜五年寛平上皇台山に幸きし命に從て密瀧を受け阿闍梨の位を授け手から袈裟、香爐、御衣等を賜ふ後また座主僧正に通じむ延長五年寂す年八十五、謚して靜觀と曰ふ（元亨釋書、東國高僧傳）

リウメイモンキン 崇明門院 徒醸翻天皇の皇太子邦良親王の妃、祺子内親王と云ふ後宇多天皇の第二皇女に生る御母は掟子女王なり元應元年十月内親王宣下、皇太子邦良親王の妃となり給ひしが正中三年皇太子薨去後尼となる元弘元年十月三宮に准じ尋いで院號宣下、三年一度門院職を止められしが延元三年四月復せらる（女院小傳、皇胤紹運錄）

リウモリアキラ 宗盛明 封馬守護、助四都、洪茶丘及び高麗の將金方慶等兵を率ゐて對馬國を侵す國兵之を討ち退く弘安四年五月又范文虎等兵十餘萬を率ゐて壹岐對馬及び筑前を侵す盛明討つて功あり（寛政重修諸家譜）

リウモリカズ 宗盛員 醫家、寛喜中右衛門の醫師となる同族宗繼、左兵衛の醫師となる（泉國名醫傳）

リウ モリナホ 宗盛直 南朝の武將、通稱右馬太郎、右馬頭盛國の庶長子にして筑前宗像城に生る母は別室諸方氏の出、茂近、新六皆庶子なり、經茂、頼義を拉して肥前に奔り菊池肥後守武光に仕ふ後北朝諸將と筑前味坂に戦ひて死す時に年七十一、其の子孫四代悉く南朝の爲めに忠烈なる戦死を遂ぐ(對馬人物誌)

リウ モリヒロ 宗盛弘 對馬豊崎の郡主、永正七年四月藩主宗義盛の命を受け兵三百を率みて朝鮮を伐つ盛弘兵船を琴浦より發す是より先き大内氏の使船朝鮮に到り國王殿使と稱す朝鮮辭するに對馬の引なきを以てす使者言ふ大内氏は鎮西の都督對馬は其の管下のみ何ぞ彼が文引を取らん朝鮮其の使を納る義盛の使者至るに及んで朝鮮受けず義盛大に怒り乃ち盛弘をして之を伐たしむ盛弘、島人の三浦に在る者と攻めて齊浦の熊川城を抜き僉使李友曾を斬り逃んで防禦使柳轉年、黃衡等と戰ひ兵皆な之れに死す鮮人の死者萬を以て數ふ六月盛弘を高崎に祀り高崎大明神と號す是れより朝鮮の通交絶ゆ(對馬人物誌)

リウヨウ 増譽 近江延暦寺(天台宗)の座主、祖大納言藤原經輔の子、幼にして佛に歸し圓城寺行觀僧正に師事して得度す昔く聖跡を巡り呪練難行して神感あり三井の千光院及び洛東の聖護院を建て熊野神を勸請す應德元年秋中宮賢子崩す白河帝、増譽を召して法華實相の深旨を聞き敕して法印に任す寛治三年三井の覺圓の譲りを受けて法務となる五月勅を受けて神泉苑に孔雀經法を修して雨を禱る、八年秋累進して天王寺の主、権僧正、廣隆寺の司、圓城寺の長吏となり康和三年春白河上皇、鳥羽院に論議を開き師に命じて證議者たらしむ翌年正僧正に轉じ三山の檢校を主どる、此職増譽より始まるなりまた洛北の一條寺に住し長治二年延暦寺の座主に任す尋で大僧正に任じ尊勝、梵釋、崇福等十三寺を兼領す嘉承二年最勝會の證議者となる永久四年二月十九日寂す壽八十五(本朝高僧傳)

リウヨウ 宗用 畫家、眞相の筆寫に法りて能

八月致仕し府の宮谷に退居し豊崎を以て湯沐の處となす。天正七年義智義純が封を襲ぐと雖も幼稚なるにより義訓これを輔佐して國事なむく十五年豐臣太閤薩摩の島津義久な討つて肥後國熊本に在陣す義訓家臣柳川惟之助訓信をして彼地に至らしめて命を受く此時秀吉訓信を見てい云ふ義訓筑前國宮崎に至り我が至るを待つ可しと此處に於て義訓義智が年少なるを以て代りて國政を執る義智を以て嗣子となす五月義智を伴ひて宮崎に至り六月七日太閤に謁す時に太閤朝鮮を攻む可き意を告ぐ義訓對て曰く彼を始めより某に對して諱なし恐らくは攻伐のこと然る可からずと申す秀吉腰刀を與ふ義訓拜受て國に歸る十六年秀吉義訓に命じて云ふ今既に城内を一統するに朝鮮國王未だ朝せざるは我を鄙むるに似たり兵を移して彼れを討つことあらん汝宜敷しく彼國に諭す可しとなり六月義訓家臣袖谷康廣を以て朝鮮に遣はし太閤の意を傳す日本と好を通じ和を誂ふことを告ぐ朝鮮王之に從はす十二月十二日卒す享年五十七、格闘宗壽長壽院と號す對馬國安樂山に葬る(寛政重修諸家譜)

ソウヨシトモ 宗義智

對馬府中藩主、姓

は平氏、新中納言知盛西海に没す遺孤羅禪あり乳母懷いて筑前國屋に走り廻りて曰く兒は播津の産夫の爲に棄られて此に漂泊す頗くは婦の爲に見を育てる事な得んと蘆屋の某機んで之を養ふ文治二年御西守護武兼資賴此兒の凡ならざるなむひのを養て知宗と名け源氏に憚り姻姓を貲し惟宗氏とす寛元四年對馬の子助國の家護と爲る文永十一年十月蒙古の寇來る時に知宗の子助國の家護皆之に死す助國の曾孫經國元弘の時北條英時を伐ち夜又または刑部と稱す經國の曾孫經康なし其弟貞國繼之讓並に屋形城を賜ふ是の歲朝鮮と相争ひ海上に航して朝鮮に於て殺す弟盛長嗣ぐ盛長七年の孫は即ち義智なり兵敗れて死す弟盛長嗣ぐ盛長七年の孫は即ち義智なり

正徳の例によらずして専ら天和の例に從はしめらる一日三使に暇を賜ひ十三日包氷の刀を拜領し家臣四人も時服、白銀等賜はる是年家臣なしして信使を朝鮮に送らし秀吉、島津氏を征伐す六月義智守と稱す七年正月足利義尹、諱字邑を完うす十八年秀吉命して朝鮮に赴き信使を求め因てまたその虚實を伺はしむ義智年少して精悍なり人皆之を

し此日義方が遺物行光の刀雲月の茶壺を獻す十二月從四位下侍從に叙任し對馬守を兼ね此日始めて入國の暇を賜ふ四年吉宗將軍職を繼ぐ時之を貢し朝鮮の正使通政大夫洪政中、副使通訓大夫寅貴、從事通訓大夫李明彦國書寶物をもたらして來聘す十月三使を伴ひて登譽す其の禮節を爲みたからして奉り其の實し難きものは盡き正徳の例によらずして専ら天和の例に從はしめらる十一年の秋を以て十年三月此事に預れる家臣等を召されて時服を贈び十一月先に人参の生根を奉りしことを貢せらる一年窮に朝鮮に渡りて交易せし者罪科に處せらるこれより諸國に於ても其の餘黨のものを识别し後は等のことあるまじき旨使を遣はして禮賀參列を送すに朝鮮の物産甘草、雞冠堆黃、馬、鶏、鴨、鴨鶏、新渡の陶器並に奥地勝覽、五禮議各一部を獻じ又彼國に漂著せしものを送り来ることと五度、我國に漂流せしものを歸し遣すことに三十一年度、義誠之を奉はる十五年十一月六日參府の時大阪に於て卒す享年三十八、玉櫻高岳大雲院と號す(中略)十三日奏者番士井甲斐守利知をして賄銀三十枚を賜ふ(寛政重修諸家譜)

ソウヨシモリ 宗義盛

對馬守護、初め盛

位下侍從に叙任し對馬守を兼ね此日始めて入國の暇を賜ふ四年吉宗將軍職を繼ぐ時之を貢し朝鮮の正使通政大夫寅貴中、副使通訓大夫寅貴、從事通訓大夫李明彦國書寶物をもたらして來聘す十月三使を伴ひて登譽す其の禮節を爲みたからして奉り其の實し難きものは盡き正徳の例によらずして専ら天和の例に從はしめらる十一年の秋を以て十年三月此事に預れる家臣等を召されて時服を贈び十一月先に人参の生根を奉りしことを貢せらる一年窮に朝鮮に渡りて交易せし者罪科に處せらるこれより諸國に於ても其の餘黨のものを识别し後は等のことあるまじき旨使を遣はして禮賀參列を送すに朝鮮の物産甘草、雞冠堆黃、馬、鶏、鴨、鴨鶏、新渡の陶器並に奥地勝覽、五禮議各一部を獻じ又彼國に漂著せしものを送り来ることと五度、我國に漂流せしものを歸し遣すことに三十一年度、義誠之を奉はる十五年十一月六日參府の時大阪に於て卒す享年三十八、玉櫻高岳大雲院と號す(中略)十三日奏者番士井甲斐守利知をして賄銀三十枚を賜ふ(寛政重修諸家譜)

ソウヨシモリ 宗義盛

對馬守護、初め盛

し此日義方が遺物行光の刀雲月の茶壺を獻す十二月從四位下侍從に叙任し對馬守を兼ね此日始めて入國の暇を賜ふ四年吉宗將軍職を繼ぐ時之を貢し朝鮮の正使通政大夫寅貴中、副使通訓大夫寅貴、從事通訓大夫李明彦國書寶物をもたらして來聘す十月三使を伴ひて登譽す其の禮節を爲みたからして奉り其の實し難きものは盡き正徳の例によらずして専ら天和の例に從はしめらる十一年の秋を以て十年三月此事に預れる家臣等を召されて時服を贈び十一月先に人参の生根を奉りしことを貢せらる一年窮に朝鮮に渡りて交易せし者罪科に處せらるこれより諸國に於ても其の餘黨のものを识别し後は等のことあるまじき旨使を遣はして禮賀參列を送すに朝鮮の物産甘草、雞冠堆黃、馬、鶏、鴨、鴨鶏、新渡の陶器並に奥地勝覽、五禮議各一部を獻じ又彼國に漂著せしものを送り来ることと五度、我國に漂流せしものを歸し遣すこと三十一年度、義誠之を奉はる十五年十一月六日參府の時大阪に於て卒す享年三十八、玉櫻高岳大雲院と號す(中略)十三日奏者番士井甲斐守利知をして賄銀三十枚を賜ふ(寛政重修諸家譜)

ソウヨシナガ 宗義暢 對馬府中藩主、姓
は寛保二年府中に生る直之助と云ふ、寶暦十四年閏四月義蕃年頃病に罹りて此の度朝鮮の信使を伴ふこと能はざるにより兼て請ひ旨に任せ義暢その家を相繼承する。宿驛に於て府典良中村に遷すす後朝鮮と交易絶えず七年正月卒す年四十八、萬虎翁石翁萬松院と號す子義成嗣き

きて學侶を引接するを聞き千里を遠とせず往てその室に謁す姫山問て曰く鐵牛兒を生ずる時如何宗令曰く石女授を勧して轎機密に回ると姫山曰く切に忌に道著することを合口を開かんとす姫山打て曰く妙唱口に干せずと令忍ち省するところ後遂に悟入を得たり同門の説を受て能登の總持寺を主り乳香を姫山に供す美濃の井益郷に靈妙庵主大江氏あり姫山師の法に薦歸し教妙寺院を革めて禪刹となし宗令を請して住持せしむ僧俗來詣して大に教坊が賤はす宗令、姫山を始祖とし自ら第二世に居る將軍興滿その徳望を聞て山林田園を喜捨すまた越中の檀信寺を新郡に建て宗令を聘して之を主とす眼目山立川寺是なり上足姫山仙公攝津の檀請けを受けて護國寺を開き宗令を奉じて開山寺より正眼寺に遷るや般に命じて雲興の席を補せしむ安改元簾正眼に遷りその丙寅に歿せり(日本洞上聯上蘇燈錄)

リウレン チヨクヲウ

宗廉直翁 神僧、遼江

及び水墨の畫に巧なり(扶桑畫人傳)

ソエイ チクハウ

祖裔竺芳 神僧、遼江

の人の、神教俱に通じ兼て文藻あり曆應年中本師石梁の後

を繼で信濃の慈壽寺に住す東西の禪徒機道を攀ぢて集る

ソエイ テツガン

祖濟哲嚴 神僧、播磨

及び水墨の畫に巧なり(扶桑畫人傳)

天先和尚に學ぶ初め能州總持寺に出て世す應永辛卯の年天先の雲興寺より正眼寺に遷るや般に命じて雲興の席を補せしむ安改元簾正眼に遷りその丙寅に歿せり(日本洞上聯上蘇燈錄)

ソエイ

祖榮 著作、雪村に學びて設色の花鳥

及び水墨の畫に巧なり(扶桑畫人傳)

ソエイ チクハウ

祖裔竺芳 神僧、遼江

の人の、禪教俱に通じ兼て文藻あり曆應年中本師石梁の後

を繼で信濃の慈壽寺に住す東西の禪徒機道を攀ぢて集る

ソエイ チクハウ

成る敕して子善徳を以て寺司となす崇神帝卽位す大臣たる故の如し帝甚だ馬子の驕恣にして權を専らにするを惡

山背大兄王各々遣詔を受け葬るに及で皇嗣未だ定す蝦夷獨り之を決せんと欲す然れども群臣相援てて

勢直庵に劣らずと云ふ(扶桑舊人傳)

卷之三

ソガケテヤマタ
ウシガハマロ
蘇我食
山田石川麻呂
我國最初の左大臣、大臣馬子の孫
倉麻呂の子、皇極帝の四年中臣鎌足と謀を合して蘇我入
鹿を誅す孝德帝の即位するや右大臣を拜す阿倍倉梯麻呂
左大臣を拜し共に金策を賜ふ左右大臣を置くは此に始ま

る、石川麻呂に異母弟あり日向と曰ふ大化五年石川麻呂を皇太子に譖す太子之を信じて遂に帝に奏す帝、大伴猶等を遣して反狀を鞠問せしむ石川麻呂曰く我當に調に詣りて自ら陳すべしと猶等之を携へて儀に走る是より先き長子興志山田に在て佛寺を營む變を聞きて石川麻呂を今

る故の如し帝甚だ馬子の驕恣にして權を専らにするを惡む五年十月山猪を獻する者あり帝猪を指して曰く朕疾む所あり何れの日か之を斬りて猪頭の如くすることを得んと多く兵仗を宮中に設く馬子之を聞きて大に懼れ其黨を招聚して潛かに弑逆を謀り詐りて東國の調を進むと稱し竊に東漢駒をして弑逆を行はしむ宮中の人大に驚擾す馬子人を遣はして之を捕へしむ是に於て人始めて馬子の所爲たるを知る然れども敢て言ふ者なし馬子深く駒を徳なりとして贈遺すること厚し帝の臥内に出入せしむ駒密かに馬子の女河上娘と姦し竊かに匿して妻となす既にして事覺はる馬子大に怒りて駒を庭樹に縛し髪を枝上に繫いで將に之を射んとし其の罪を責めて曰く賊奴驕愚なり駒く天皇を弑すと駒大に呼びて曰く我當時大臣あるを知りて天皇あるを知らずと馬子益々怒り自ら劍を取りて其の腹を剥き遂に其の首を斬る推古帝の時馬子彌々威福を専らにし其の病むに及びて男女一千人之が爲めに出家す嘗て皇太子と敷を奉じて天皇紀國紀及び臣、連、伴、造等の本紀を撰す三十四年死す桃原に葬る馬子飛鳥河の上りに日本史)

岐の人、字は不言、別號は默翁、五郎と稱す、人となり
溫厚にして文事を好み口臧否を言はず他人の短を説く者
あれは輒ち其の長を擧げて之に應ず家道本と裕屢々財を
散じて族人の窮を救ひ舊知に自存する能はざる者あれは
また之を家に收養す此を以て産を破るも悔いず郷黨盡く
其の徳に服すその六十に當り國老以下詩歌を贈りて之れ
を齎する者多し是より先き子製平鐵筆を挿みて四方に周
游す是に至りて歸省すまた廣く四方に慕りて千餘首を得
て齋筵に通む天保九年病みて死す年九十四(拙堂文集)
リガウ ロクイウ 十河六有 儒者、名は
大年、字は永達、京都の人、夙に福井敬齋に從ひ濂洛の
學を受け成るに及んで仁和寺宮に侍講すること多年また
詩名あり人と爲り謹嚴にして浮靡の風を厭ふ徒に授くる
こと三十年天保六年十一月八日歿す年六十一
リガ エミシ 蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝
の三十四年大臣となる世に豐浦大臣と稱す、帝崩す田村

まらず蝦夷獨り之を決せんと欲す然れども群臣相援けて和せざるを慮り阿倍麻呂と謀りて廷臣を家に要し麻呂をして之に謂はしめて曰く方今國家主なし若し早く定めざれば懼らくは變あらん當さに誰を立てて嗣となさんと因て遣詔を擧げて各々その志を言はしむ群臣敢て對ふる者なし之れを問ふこと再三是に於て群臣或は田村皇子を援け或は山背王を推す惟々蝦夷の弟倉麻呂のみ曰ふ今日の事は轍く言ふべからず當に熟思して議を陳すべしと蝦夷乃ち衆議の和せざるを知る而して山背王蝦夷の意田村皇子に在るを察し敢て復た争はず唯々蝦夷の叔父摩理勢固と山背王の即位を欲す蝦夷其の違拒するを怒り兵を遣して之を殺し遂に群臣と田村皇子を翼戴す是を舒明帝となす蝦夷大臣たる故の如し皇極帝の元年北越蝦夷來朝し食を朝に賜ふ蝦夷亦た家に娶し躬自ら慰勞す蝦夷強僭溢々甚だし祖廟を葛城高宮に建てて八佾の舞をなし歌を作りて之を歌ひ大に國內並びに百八十郡の人民を發して豫め二墓を今來に築き一は大陵と曰ひ己が墓となし一を小陵と曰ひ子入庵の墓となし人に謂ひて曰く願はくは死後に蘇我臣は専ら國政を擅ままにして多く無禮を行ふ天に使役して息むことなし上宮大娘姫王憤を發して歎じて曰く蘇我臣は専ら國政を擅まにして多く無禮を行ふ天に二日なく國に二王なし何に由りてか意に任して大に吾民を役するやとはより兩家怨を構ふ二年災異屢々起る蝦夷將に出でんとす諸巫覡木綿を樹枝に繋ぎて其の渡橋を候ひ争ひて神語を陳ぶ紛擾喧嘩聽き悉くす可らず十月蝦夷病に因て朝せず私に紫冠を子入庵に授け以て大臣に擬し次子を呼びて物部大臣と曰ふ其の祖母物部氏の貴財に依りて大に威福を張る明年餌鶴、子を蝦夷の大津の宅に生み劍池の蓮ニ一莖二莖なるものあり蝦夷曰く我が家將に榮えんとするの瑞なりと即ち金字を以て之を書し法興寺に納む此時巫覡復た神語を陳す古老以爲らく風を移すの兆なりと父子偕通涵々甚だし子入庵敗ぶるるに及びて蝦夷も亦誅せらる(大日本史)

勢直處に劣らすと云ふ(扶桑叢人傳)

**リガクラヤマダ イシカハマロ 蘇我倉
山田石川麻呂** 我國最初の左大臣、大臣馬子の孫倉麻呂の子、皇極帝の四年中臣鎌足と謀を合して蘇我入鹿を説く孝德帝の即位するや右大臣を拜す阿倍倉梯麻呂左大臣を拜し共に金策を賜ふ左右大臣を置くは此に始まる、石川麻呂に異母弟あり日向と曰ふ大化五年石川麻呂を皇太子に譖す太子之を信じて遂に帝に奏す帝、大伴泊等を遣して反狀を鞠問せしむ石川麻呂曰く我當に嗣に詣りて自ら陳すべしと泊等之を携へて儀に走る是より先き長子興志山田に在て佛寺を營む變を聞きて石川麻呂を今來に迎へ擁して佛寺に入らしむ興志追兵を拒まんと欲す石川麻呂聽かず興志猶ほ兵を聚めて小舉田宮を焼かんと欲す石川麻呂その謀を聞きて曰く汝は死を憂するか曰く否石川麻呂乃ち興志及び山田寺の僧徒を諭して曰く夫れ人の臣子たる者豈に君父に忠孝の道を失せんや我れ此御藍を造る亦た身の爲めに非す天祚の永久を祈るのみ今余は諭者の爲に不測の罪に陥る此に逃れ来る所以は從容死に就かんと欲するなり平生の忠誠は死すとも猶ほ渝らざるなりと乃ち佛殿の戸を開きて醫ひて曰く願くは生々世々君上を怨みさらんことをと遂に自剄して死す妻及び三男一女その餘從死する者多し是の日大伴泊、蘇我日向兵に將として石川麻呂を追ひ黒山に至るに及びて會々土師身、采女使主麻呂山田寺より馳來り告げて曰く石川麻呂既に妻子と共に縊れて死すとはに於て泊等丹比坂より歸る翌日木麻呂、日向、穂積嘔兵を率ゐて山田寺を圍み物部二田鹽をして石川麻呂の首を斬らしむ、鹽刀を抜きて先に其の肉を剔り衆に示し叱咤號呼して之を斬る石川麻呂の事に坐して斬らるる者田口筑紫、耳梨道德、高田醜雄、額田部湯座連、秦吾寺等十四人殺せらるる者十九人、流さるゝ者十五人、既にして石川麻呂の家を籍しその家資を檢するに好書は皆記して曰く良太子の書と重寶は皆記して曰く良太子の物とはに於て太子始めて其の寛を悟り愧悔哀歎遂に日向を以て筑紫太宰の帥と爲せしは實に之を貶するなり時人之を隈流と曰ふ(大日本史)

(皇國名醫傳)
ソガ ケンセン 曾我立仙　畫家、傳詳な
らす越前守に任じ能く龍を畫く(鑒定便覽)
リガ リュセン 曾我壽仙　醫家、慶祐の子、
通稱洞庵、後父の稱を襲ひて慶祐とす天正中豊臣太閤の
腫瘍を療して効あり因て法印に叙せらる慶長十六年後陽
成帝久しく潰瘍を患ふ壽仙藥を上りて乃ち瘻ゆ獻を慶法
院と賜ふ後外科傳語を著はして之を獻す帝大に之を善と
し御筆鐵に題す又た右府今出川公に詔して爲めに序を撰
ましむ當世之を榮とす、子字は祐通稱は伯安、後慶法院
の稱を襲ふ、寛永七年幕府の醫官と爲る(皇國名醫傳)
リガ スケナリ 曾我祐成　伊東祐親の孫、
字は一萬、父河津祐泰、從祖父工藤祐經の爲に殺さる時
に一萬五歳、弟宮王(時致)三歳その母屍を抱きて哀哭し
曾我祐信に禮するに及びて兄弟遂に祐信の爲めに鞠はある
萬泣きて曰く汝等成長せば必ず髪の頭を斬らんと母再び
兩孤を撫して曰く汝等成長せば能く父の髪を復するか一
年稍々長じて思を焦し心を勞し復髪の念未だ嘗て一日も
懈たらす會々源賴朝、平氏を滅ぼし天下の兵馬を管轄す
祐經之に事へて親信せらる賴朝嘗て祐親を怨むを以て間
に乘じて祐泰の遺孤を殺さんことを勧む賴朝即ち梶原景
季をして曾我に往き祐信に諭して二兒を幕府に致さしむ
母子泣きて別る景季心に之を憐み還りて其の狀を白し之
を宥さんと請ふ聽かず和田畠山等營救甚だ至る二兒因て
放歸せらるることを獲母その死を免さるるを喜びて切に
之を戒め深く自ら晦匿せしむ一萬年十三、名を祐成と更
め繼父の氏を冒して曾我十郎と稱し乃ち宮王を遣して箱
根山の僧行實の弟子となす宮王その僧と爲んことを憂ひ
て竊かに曾我に還る是より兄弟大磯、黃瀬川、三浦に歷
遊して屢々祐經を覗ふ祐經出る毎とに卒を從へ自ら衛る
兄弟時に或は望見するも手を下すこと能はず建久四年賴
朝富士野に獵す祐經從ふ祐成、時致喜びて曰く天なりと
して賴朝府に還る日ありと聞き兄弟之を憂ひて曰く時再
び得難し機失すべからず今夜急に神野の營に入り以て祐
經を殺さんと乃ち陽りて夜を營する者となり列營の前を
過ぎて祐經の臥所に入る祐經已に別室に移る兄弟彷徨な
す所を知らず會々畠山重忠の家士本多親經至る素とより

兄弟の其の志を遂ぐるを欲す因て祐經の所在を指畫して去る是の夜祐經娼妓を召して吉備祠官王藤内と宴飲し大に酔て酣寝す兄弟炬を擧げて相視て曰く醉臥の人を殺すは猶ほ死人を斬るが如しと因て席を踏み大に呼びて曰く祐成、時致父の爲に簪を報すと祐經驚き覺め將に刀を執つて起たんとす兄弟刀を揮ひて交々下だし遂に之を寸斬し井せて王藤内を殺す娼妓驚き呼びて曰く曾我兄弟父の簪を殺すと時に五月廿八日、雷雨闇黒晝中騒擾す平子野右馬丸、愛甲三郎等倉皇出でて聞ふ兄弟十許人を殺傷し力絶まりて疲る祐成、仁田忠常と鋒を接し遂に其の殺す所となる時に年二十二(大日本史)

一の名は師龍また蟬聲と曰ふ、蕭白は其の號、また如鬼聲山、蛇足軒、鬼神齋、飛聲等の號あり初め畫法を高田敬甫に學び後曾我蛇足或は雪舟の風を修めて遂に一機軸を出せり此の時自ら曾我蛇足と稱すその山水人物を盡くや悉く水墨を以てす筆意顕る強健にして人意を驚かす殊に人物の圖に至りては形容活動の趣ありて筆意紙外に溢る實に當時の名手なり怪腕を以て一派をなす嘗て本願寺の教主使を遣にして蕭白の家に抵らしむ使者門に至り問て曰く蕭白在りや否やと蕭白親ら應じて曰く在らずと使者還りて蕭白が聲に似たるを疑ひ反り問て曰く先生在りや否や蕭白乃ち出でて之に接すその襟度此の如し天明元年正月七日歿す京都堀川頭興聖寺に葬る(鑒定便覽、扶桑畫人傳、畫乘要略、平安墓所集)

リカ **リウチヤウ** 曾我宗丈 費家、越前の人、蛇足の子、式部入道と稱す、父に畫法を學びて彩色の花鳥に巧みなり文明十五年十一月十五日歿す(鑒定便覽、本朝畫史、名人忌辰錄)

リカ **タイケン** 曾我耐軒 儒者、名は景章字は子明、原姓は春田氏、初め名は知章、字は子眞、詩仙及び蘭雪と號す、その先水野藍物に仕ふ諱二百石世々藩の教職たり耐軒幼にして出でて藩の伊藤氏を繼ぐ十五昌平聲に入り贊を古賀洞庭に執り後松崎懐堂に就き共に經術を受く長する所和漢史乘と古今體詩とにあり明治元年徵されて西京に赴き十二月贊を聚り西京岡崎邸に囚せらる二年九月岡崎藩知事本多公朝に請うて之れを出し藩の文學を授く明年五月文學總括に遷り九月二十日を以て歿す年五十五門人私かに簡文先生と謳す、著はす所耐軒詩草、耐軒文章、耐軒遺稿、幽討餘錄及び五倫名義辨證あり(墓銘)

リカ **ダリク** 曾我蛇足 畫家、式部と稱し後難髮して夫泉と曰ふ、越前朝倉氏に仕へて世々武臣たり、性畫を好み周文を師とす然れども筆力粗にして其の師に似ず畫く所の山木人物花艸鳥獸悉く濃墨を以てす皆豪邁活動の勢ありて氣韻蕭疎たりまた密畫は宋人明人の

カケンカス

ソラス
ソラセ

ノカノカタ

1911

筆意に似たり時に大徳寺一休和尚書を蛇足に學ぶ蛇足一休の像を畫く今尚世にあり世人賞譽すまた布袋大黒對奕の圖あり一休之れに譜す筆力勇健なりと云ふ應仁年中の

人(本朝叢史・扶桑畫人傳・鑒定便覧)

リガチ
チカスケ 曾我近祐

奉行古祐の子、椎右衛門また又右衛門と云ひ母は小笠原

長房が女なり寛永三年西城小姓組に列し慶米二百俵を賜

ふ四年十一月當番の夜同僚村孫九郎某、木造三郎左衛門某、鈴木九右衛門某兩人と爭論して刃傷に及び木造、鈴

木傷な蒙る孫九郎猶も追うて之を倒さんとす近祐、倉橋

宗三郎忠堯と共に走り孫九郎を細留む此時近祐も斬を負ふと雖も即時に狼藉を鎮めること御恩ありて二百石

を加へられ慶米を改めて下總國小金領にて四百石の地な

賜ふ八年三月將軍家光より新聞の地を加へられ五百石餘石を知行す可きの朱印を下さる十年御書院番に移り二

月采地二百石を加へらる十八年細川越中守忠利封地肥後

國熊本に於て病に罹るにより三月御便に指されて彼の地

に行く十九年五月より御城渡の奉行を勤め廿年十一月仰

を奉はりて川勝丹波守安堵と共に松平相模守光伸が封地

因幡國島取に至り自付代を勤むの年賀正月被沼左衛門將地

照封地丹波國龜山に於て卒するより十一月佐々長次と共

に命を奪りて彼地に赴く明暦元年十二月御先号の頭とな

り二十九日布衣を著することとな計さる二年十二月采地三百石を加恩あり萬治元年三月父に代りて大阪町奉行とな

り千石の地を加へられ總て二千二百餘石を知行す六年遺

跡なつぎ先に賜ふ處の采地は收めらる寛文元年九月十三

日大阪に於て死す年五十七、法名正心(寛政重修諸家譜)

リガチ
チヨクアン 曾我直庵

曾我直庵

畫家、細祿の

子、山水人物花卉鳥獸を善く最も鷹を畫くに巧みなり

その筆勢生るが如し世人に稱譽す(鑒定便覧・畫乘要略、

續本朝畫史、扶桑畫人傳、和漢畫集書覽)

リガチ
トキムネ 曾我時致

伊東祐親の孫、

小字は宮王、父河津祐泰は從祖工藤祐經の爲めに殺され

る時に皆王三歳、後母の曾我母信子に再懲するに及びて曾

我氏を冒す年稍々長るに及びて嬉戯するに常に擧刻を

賜ひ慶長十九年大阪の役に從ひ元和元年の役には旗本の

三の隊にありしが抜擢して一二の隊に加はり敵と戰ひ首

一級を得たり凱旋の後軍令を犯して抜擢せしな咎められ

閉門し其後許さる寛永三年遺跡を嗣ぎ先に賜ふ處の采地

石は弟包助に賜ひ五年上總國海上郡の内に於いて千石の

朱印を下さる後將軍光の仰に書札法式を久保吉右

衛門正元に傳ふ八年二月御使番に轉す四年四月御付に

進み六月加藤記後守忠廣鎮地没收せらるるにより仰を奉

はりて肥後國に赴く十一月布衣を著することとな計さる十

年二月今村傳四郎正長と共に長崎に到り假の奉行を勤め

朱印を下さる後將軍光の仰に書札法式を久保吉右

ソカチ—ソカト

ソカト

ソカナ—ソカハ

一四三六

ソケイ

ソケン

ソサン

一四三八

べしと明春母病危篤なり趣て湯薬に侍し黙して佛天に禱る自ら仰を剝て而して進む母の病ひ立どころに瘳ゆ是の冬堂司に充つ七年臘月三十日後山火發して林木悉く焼く一衆と同じく之を救ふ適々逆風焰を返す回避するに處なし遂に坑莽中に落ち穿て一團の活火となり頭面手足傷損されども知らず僧智圓等後より來りて急に呼び一を扶げて引き出す一、機に當りて豁然大悟す明年正月丈室に侍す元命じて臨濟の三玄趙州狗子の二則を頃せしむ一聲に應じて頃出す其の語流るる如し元曰く今日汝を瞞するを得ずと夏錫を雪峰の崇聖寺に移すも敢て師位を以て自から居らす愈々自ら詔昧し頭陀を以て生となす九年春一月召書に接し將に海に航せんとし寧德縣に至り路通じ難き雪峰に回る十一年隱元遠く日本の召に應す明年一、元の召書に接し將に海に航せんとし寧德縣に至り路通じ難きを以て天台に上り石梁を渡り徧く名山に遊び知識に見ゆる事三十餘員、各機語あり末後再び姑蘇に返りて費隱和尙を虞山に省観す十四年二月東航して長崎に到る時に本朝の明暦三年、王何、林魏の諸公請じて崇福寺に住せしむ寛文三年隱元を新黃檗に省す路豐前を經開善寺に客たり小倉侯接待法を問ひ拜送して別る既に檗山に上る元命じて竹林精舍に居らしむ冬木庵と兩座に擅んでらる是の時元四海の禪流を攝す時に開戒に值ふ一之が教授師たり明年秋九月黃檗を辭し將に古雪峰に同らんとす舟豐前の界に次る小倉侯時に迎へて金栗園に館せしむ繼で福聚禪寺を立て請ひて開山第一祖となす住職四年大に化權を振ふ八年秋長嗣洞公を擧げて補處となし自ら長崎崇福寺に退隱す十年秋微疾を示す明春二月疾再び發す五月六日親しく遣囁井に規條六則を書す二十日正午趺坐香牛炷の間十五年、嗣法柏巖節、千呆僕等の五人を出だす著はす所全錄二十五卷井に佛祖道影贊あり尾州の東輪、豫州の千秋、攝州の雪峰皆な之が開祖となる(高僧傳)

る鑑遷化す凌霄を下りて月石溪に靈隱に聞懷溪に玉几に
謁し後ち飛來に寓す觀物初め大慈を主どる祖元、觀と世
系あり又た南山に兄事す乃ち舊義を講ぜんことを思ひて
往きて之に依り意を發して持淨すること二載江湖其の趣
操を高しとす一時井櫻を踰みて打水輕轍を牽動するを見
忽然として無礙の機用を得たり是に於てか向きに佛鑑示
す所の狗子無佛性話及び香嚴擊竹の頬又餘蘊なく始めて
佛鑑妙手の深密なることを識得す時に年三十六、大傅賈
似道祖元の道譽を聞て台の眞如寺に剃す居ること七歳、
兵戈起りて寺刹を驟擾す乃ち潛かに溫州の駁湯に過ぎる
丙子の歲兵温境を厭し衆を擧げて逃竄す祖元獨り堂裏に
兀坐す虜酋將さに刃を頭に加へんとす祖元動かず一偈を
述べて曰く「乾坤無レ堵レ卓ニ孤筇、喜得人空法亦空、珍重
大元三尺劍、電光影裏斬ニ春風」と群虜感悔し禮を作し
て去る明年四明に復る天童の一環溪請ひて第一座に居ら
しむ己卯の歲我建長寺席を虛うす平時宗疏幣を具へ海に
航して名宿を聘す祖元之に應じ五月太白を離れ六月太宰
府に着く即ち弘安二年なり八月相模に到る時宗弟子の禮
を執り遙へて福山に入る待遇日に渥し五年冬圓覺寺成る
祖元に命じて開山第一の祖となす開掌の日群鹿筵に臨む
祖元吉徵となし即ち山に名づくるに瑞應を以てす四年春
正月時宗來り謁す祖元筆を探り書して時宗に呈して曰く
煩惱すること勿れと時宗曰く何事ぞ曰く春夏の間博多騒
擾せん而かも一風纏かに起りて萬艦掃蕩せん願くは公慮
となす莫れと果して海虜百萬鎮西に寇し風浪俄かに起り
に語りて曰く吾に一事あり季秋に至らば自ら辨せん照曰
く何事ぞ祖元笑ひて答へず月末に疾を示す九月三日親ら
遣書を書して太守及び諸方に別る亡慮致通晚に偈を以て
衆に示して曰く「諸佛凡夫同是幻、若求ニ實相ニ眼中埃、
老僧舍利包ニ天地、莫ア向ニ空山」按・冷灰と亥時に衣を更
めて端坐し偈を書し筆を置て逝す年六十一、祖元貌俊麗
にして顧盼法とる可し平居衣を卸さず而かも亦た一被の
上に僧袈裟を綴る夜分に供するなり其精進なること此に
類す佛光禪師と謳す(元亨釋書、龍門夜話)

阿州興源寺玉潤和尚、尾州の卓洲和尚等に參し終に蘊奥を端し卓洲化後備前國清の月璣に從ふ後歸て見性に住す嘉永四年詔により法山に住す又山城の圓福に移り後亦尾張に招かれ德源寺に移る慶應元年その徳雲上に聞ゆ詔して神機妙用禪師の號を賜ふ再び法山に住す明治元年十二月十四日寂す年七十(禪林僧寶傳)

ソシウ 祖秀 醇、久我通堅の三男、初め鹿苑寺に住す後還俗して加藤清正の臣となり肥後に住す

ソシン 祖辰 東福寺の住僧、字は南宗、正徳中に寂す世に其靈跡を稱す(書畫便覽)

ソシン 祖心 比丘尼、齋藤佐渡守利三の女、牧村長兵衛政玄に養はれ前田利家の老臣小松の城主前田對馬守長種に嫁し前田了心入道を生む長種卒して野州宇都宮城主蒲生飛驒守秀行の臣三春の城代町野長門守幸和に再嫁し一女を生む幸和卒後剃髪して祖心比丘尼と號す春日局と近親たるを以て常に江戸城に住し家光の左右に侍し春日局と同じく出頭たり後公命によりて武州稻田村に一字を建立す即牛込の濟松寺是なり御朱印三百石を賜ふ先夫の子前田了心の男兵四郎を養ふて子となし牧村の姓を冒さしめ幕府に仕へ五百石を賜ふ(將軍外戚傳)

ソシユン 楚俊 禪僧、南禪寺に住すもと元の人、虎岩淨伏の法嗣、元徳中東渡し建長、建仁、南禪諸寺に住す佛日僊慧禪師の號を賜ふ建武三年九月寂す年七十(鑒定便覽)

五

ソシヨウダウ 素松堂 書家、松花堂の門人、平安の人(鑒定便覽)

ソセイ 素性 歌人、姓は良峰、朝臣、左近衛少將宗貞の子、俗名を玄利と云ふ、清和帝に仕へ左近將監に任す後父の勸に因り兄と共に出家す雲林院及石上の良因院に住す寛平八年閏八月宇多帝雲林院に行幸し大納言源朝臣をして勅を奉じて宣せしめ素性大法師を權律師となし弘延、素性兩法師に度各一人を賜ふ共に起て稽首し聲を擧げて歎喜す昌泰元年宮龍遊覽の寺良峰明臣を教ら

て良因朝臣を賜ふ住所の名に因りてなり延喜六年二月二十六日召されて製芳舎に於て御屏風を書し同九年十月二日召されて御前に於て御屏風に書す左近衛中將源定方をして酒を給ふ因て歌を獻す即ち綠絹細御馬等を賜ふ歿年未詳

リセイダウシュジン 蘇生堂主人 博物家
姓氏詳ならず、寶永七年諸島呼子鳥三巻を著はし鳥類の銅養法を述ぶ(日本博物學年表)

リセキ ムリウ 疎石夢窓 禪僧、伊勢の人、字多天皇九世の裔孫、四歳にして母を失ひ出家して甲斐國平鹽山の空阿法師に就く師試みに群書を授くるに一覽すれば輒ち記憶する嘗て法華を誦して以て先妣に報ひ自から死屍九相の變を圖し壁に掛て觀想し色身は空華の如くなる事を了知す年十八にして祝髮し初め名を智曜といふ南都の戒壇院に抵り示觀律師を禮して滿分戒を受く尋で笈を負ふて遊學し顯密の二教を修む久うして歎じて曰く佛法は義學の詣る所にあらずと深く教外の旨を慕ふ一夕夢みる支那の疏山石頭の二刹に遊びしに一人の龐眉の僧あり達磨の像を持して之に授けて曰く爾ち善く奉持せよと已に寤て自から謂らく吾禪宗に於て因縁ありと因て今の名に改む洛に上り衣を易へて無隱範公に建仁に依る様下に兀坐して殆ど寢食を忘る明年鎌倉に往て無及詮叢航然、桃溪悟、凝鈍性の諸禪師に參す皆法器を以て稱す正安の初め一山和尚建長に住し疎石を擧て擇木寮に居らし一夕坐久うして起て壁に靠むと欲し誤て顛仆し豁然とし謁して教を請ふ得る事能はず萬壽に往て高峰和尚に參す高峰の言ふ所尙其旨を得ず辭して常州の白庭に如き茅に坐して自から誓て曰く若し休歇を得ざれば高峰を見ずと一夕坐久うして起て壁に靠むと欲し誤て顛仆し豁然とし謁して教を請ふ得る事能はず萬壽に往て高峰和尚に參す高峰の言ふ所尙其旨を得ず辭して常州の白庭に如き茅にて居らしむ四方の禪侶風に櫛て集まる正中二年疎石年五十一、後醍醐天皇召して宮に詣らしむ帝便殿に御して特に錦座を賜て佛心宗を説かしむ説く所旨に契ひ時刻を終して倦まず乃ち詔して南禪に住せしむ疎石奏して曰く臣僧志し煙霞に在て出世を願はずと帝曰く朕師を南禪に住せしむる所以は萬幾の假以て首を問えしと次するのみ

疎石寂信の深きに感じ八月入寺開堂し辨香を拈出して佛國の恩に供す嘉曆元年南禪の印を解て勢の普應寺を開く元徳元年圓覺を禮し住持すること二年百廢皆舉る元弘二年帝已に復辟し相模守源直義に敕して官使を降して疎石を召す秋七月闕に詣て恩を謝す帝特に國師の號を賜ふ建武元年再び南禪に住せしむ近臣帝に勧て禪宗を廢せんと欲する者多し帝將に禪徒の行業を試んと欲し十一月百官を率ゐて寺に入り龍駕を駐むその夜三更帝親から眾を巡り衆僧の禪坐嚴肅なるを見早晨に僧堂に入りて齋樂序あるを見以て禮樂備れりとなす齋罷て疎石に宣し上堂し四頭首に命じて秉拂せしむ帝歎じて報ます是に繇て信禪益々深く腴田若干畝を賜て以て香積を贍はず疎石偈を作て恩を謝す三年春京師大に亂る由て南應を退て臨川に居る將軍源尊氏疎石を幕府に請じて欽て示誨を求む普應己卯の春攝州の太守藤原親秀西方教寺を革めて禪刹となし禪を厚うして疎石を延く秋八月後醍醐帝崩す尊氏勅を奉じて天龍資聖禪寺を建て帝の冥福を修す壇設極めて麗はし疎石を請じて住持と爲す康永元年夏光嚴上皇西方寺に幸して衣盃を稟く秋八月詔を奉じて東山八坂の塔を慶讃す貞和元年八月先皇の七周忌に值ひて天龍寺に慶讃す特に金襴衣縗袍を賜ふ太上皇上皇および光明帝百官を帥て臨觀應元年春光明上皇および國母皇太后疎石を内道場に請じて衣鉢並に法名を受く二年八月徵慈にかゝり九月期衆春上足無極玄公をして其住職を續がしめ雲居庵に退く天皇疎石を召して宮に入れ師資の儀を展て正覺の號を加ふ觀應元年春光明上皇および國母皇太后疎石を内道場に請じて衣鉢並に法名を受く二年八月徵慈にかゝり九月期衆に告て曰く我世縁近きにあり疑あるものは問ふべしと衆競て室に入て請詞するに機に隨て開發す兩太上皇寺に幸して疾を問ふ疎石飲て恩を謝し爲めに法を説く晦日怡然として化す年七十六、法臘六十、疎石性質溫雅自然に物を感ぜしむ上王公より下匹夫に至るまで一たび音容に接するもの鑽仰せざるはなし後醍醐帝以來七朝の師號を賜ふ請錄五卷あり梓に録して世に行はる明の翰林學士宋景濂碑銘を作り以て其徳を旌す(本朝高僧傳)

ソシウーソセイ

ソセイ—ソセキ

ソセイ

一四三九

一四三九

ソタウ—ソタニ

徳兼備の名あり織白景從す應安七年十一月廿六日に逝く

(本朝高僧傳)

ソタウ 素道

歌人、東六郎行氏と稱し素道と

號す素通の子なり

ソタニ ガクセン

曾谷學川

篆刻家、名

は之唯、字は應(一に長聖に作る)學川と號し別に讀騒

また佛齋と號す、通稱仲介、京都の人、夙に儒學を片山

北海に受け篆刻を高芙蓉で學び遂に蘿奥を究む八稱して

芙蓉の影子と曰ふ芙蓉山房私印詔にその刻印に載す芙蓉

蒼の會を東山を開きその講に題して東山畫塾と曰ひ且

つ之唯に謂て曰く他日吾子、斯の舉を浪華に尋が七月稻

題するに江霞印影を以てする可なりと寛政九年閏七月稻

毛屋山將に東都に遊ばんとす之唯等御道の宴を浪華北江

橋干樓に設け同人刻する所の印を継めて譜と爲し題して

江霞印影と曰ふ以て先師の意を了するなりと云ふ、著す

所、漢篆千字文補遺、印籍考、印語纂等あり寛政九年十

月二十日歿す年六十

ソタニ ケイデン

曾谷慶傳

醫家、宗祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ アラスケ

曾禰荒助

政治家、山口

く倭の春日至り櫻井の上に轟ひ自ら酒を酌み以て烏賊

津を勞ひ即日京師に入る烏賊津姫を候吾子籠の家に留め

入て其の狀を奏す帝嘉之特に之を褒賞す后宮の至るな

知り色平かならず帝之を憚り宮に入れる時薬を獻す

造り之に處く明暦二月帝潛に藤原に幸し之を寵ふ姫之を

知らず帝を慕ひ聚うて曰く「わがせこが來べき實なりさ

さがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも」と帝之を感じ乃ち娘

返歌を奏ふ后之を聞き大に懲る姫益々を憚り宮を離

れ遠居せんことな誇ぶ帝更に宮内の中茅渟に造り姫を

伏見に於て徳川家康に謁し後駿府に昇り翌正一年二月法眼に叙す十

四年十一月法印に昇り後豊臣秀吉御體を慰ふ時薬を獻す

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ アラスケ

曾禰荒助

政治家、山口

く倭の春日至り櫻井の上に轟ひ自ら酒を酌み以て烏賊

津を勞ひ即日京師に入る烏賊津姫を候吾子籠の家に留め

入て其の狀を奏す帝嘉之特に之を褒賞す后宮の至るな

知り色平かならず帝之を憚り宮に入れる時薬を獻す

造り之に處く明暦二月帝潛に藤原に幸し之を寵ふ姫之を

知らず帝を慕ひ聚うて曰く「わがせこが來べき實なりさ

さがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも」と帝之を感じ乃ち娘

返歌を奏ふ后之を聞き大に懲る姫益々を憚り宮を離

れ遠居せんことな誇ぶ帝更に宮内の中茅渟に造り姫を

伏見に於て徳川家康に謁し後駿府に昇り翌正一年二月法眼に叙す十

四年十一月法印に昇り後豊臣秀吉御體を慰ふ時薬を獻す

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュセイ

曾谷壽仙

醫家、慶祐

の子、母は常清菴女、寛永元年九月法眼に叙す八年

二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼き寄舍

の醫となり西城に勤仕す十一年家光上洛の時及び日光山

参詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞

(後水尾上皇)御惱あるにより命を受け京師にのぼるこ

の時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱

胎惑を恐ひし東城に勤務を獻す承元年二月十七日死す年五十

五、法名雲岸葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗怡某が女後妻は

岩崎豊後守某が女(

ソノモーリヘン

ソヘシ

ソヘシ—ソマン

一四四四

リノ モトヒラ 園基衡 青山流生花十七世
基香の子、正二位大納言に至る寛政十二年活花手引草を著す桂月園泰准之を校す

リノヤマ イウザン 園山西山 出雲落の書者、名は雄字は叔飛また文恭と號す、初め桃白庵に後宇佐美満水及びその門人小川豊州に江戸に學び藩公の侍説となり晚に明教會祭酒となれり文政四年歿す年六十九

(出雲詩絵)

ソフウ 洋風 俳人、紀伊の人太津無名庵の六

世名は淋澄、字は徳往、爾時處方廣と號す京都高田山の僧蝶夢の門に入り俳諧を學ぶ寛政十二年歿す年四十九

ソフエ チュウエエ 祖父江重兵衛 機器

家、愛知縣丹羽郡榮村の人、夙に心を機械の革新に傾け明治十一年有志と謀りて愛知物語組を設け爾來折闇相競き困危窮りに難るも老々而爲せす筆力も原紙に選擇され其の他同志と共に名古屋筋組合に研磨、機械の整齊に端し最も思を染められたる組合に聚らし色質變つながらよく需要傾に着し清韓兩國にも多少の輸出を見るに至るまた梳毛機を開始し幾多の試験を經て遂に太陽機と稱する一種の新機を案出して世上の賞讃を博し其の他同志と共に名古屋筋組合及び岐阜組合に於て此處に滅んで了(日本洞上聯燈錄)

ソヘジマ タネオミ 副島種臣 政治家、

舊佐賀藩士枝吉忠兵衛の次男、文政十一年九月九日生る、幼名二郎、出でて副島利忠に養はれる幼にして學を實見校吉神陽に受け長じて藩校の教授となる藩主開拓藩政を改革するに當り建言する所少からず後佐賀藩の長時に致達館を建て宣教師フルベリキを聘して藩士に洋學を教授せしむるに及び種臣行きて其の監督となり傍ら洋學を研究し從來清人の譯書或は高野長英等の著書に就き講究した

(日本洞上聯燈錄)

ソミヤウ テンゼン 祖命天先 禅僧、嘗て佛名

經を以て開庵に請益す庵寧を愛て曰く汝が名は祖文と申す當下に旨を領して禮拜し偏な呈す初め持寺に出世し未だ幾くならずして泉龍に移り道大に振ふ永正戊辰龍澤寺に移る事幾つて再び復た泉龍に還り終に此處に滅んで了(日本洞上聯燈錄)

ソミヤウ テンゼン 祖命天先 禅僧、嘗て佛名

り或は曰く醫を業として仙百と號し傍ら手跡の師たり又曰く輔師なりと寛政中頃より敵討の草双紙を著して名あり著す所三百餘種文化四年三月九日歿す年五十九(藏曲小説通誌)

ソミヤウ テンゼン 祖命天先 禅僧、嘗て佛名

州の人菅原道眞の裔、其母衣冠の人梅花一枚を與ふると夢みて姫もあり生るとき異香室に瀧つ、髪亂にして凡童に過ぎ五歳に及で語を解す詩文の類學に於て能くす時人皆丞相の再生と稱す夙に禪門に慕ひ十六にして俗な

とあり屢に正眼寺に左右す應永八年八月鷹法衣を授け雲門の春雲興寺に同り西庵に老矣す長祿二年戊寅八月四日偶に書し怡然として遷化す(日本洞上聯燈錄)

ソニイ 尊意 天台山の座主、平安の人、姓は舟生氏、其の先は應神天皇より出づ意生れて靈表あり市

めで六歳、輩を茹ばず讀書を嗜み殺を禁す一僧其の梵種文殊、金剛薩埵、不動明王等々誘惑を加ふるを感す延長三年夏暑す勤む奉じて雨を所る四日大雨に降る因て座主き晝夜持詔して家に歸らざること三年、乃ち古山に登り始祖となす文至て尋龍な度す辛卯の秋正節に移る文安甲子祖父江氏の請に應じて慈日寺を開き第一世となる丁卯の春雲興寺に同り西庵に老矣す長祿二年戊寅八月四日偶に書し怡然として遷化す(日本洞上聯燈錄)

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(智恩院什物帳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 天台山の座主、平安の人、姓は

舟生氏、其の先は應神天皇より出づ意生れて靈表あり市

めで六歳、輩を茹ばず讀書を嗜み殺を禁す一僧其の梵種

文殊、金剛薩埵、不動明王等々誘惑を加ふるを感す延長

三年夏暑す勤む奉じて雨を所る四日大雨に降る因て座主

き晝夜持詔して家に歸らざること三年、乃ち古山に登り

始祖となす文至て尋龍な度す辛卯の秋正節に移る文安

甲子祖父江氏の請に應じて慈日寺を開き第一世となる丁

卯の春雲興寺に同り西庵に老矣す長祿二年戊寅八月四日

偶に書し怡然として遷化す(日本洞上聯燈錄)

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

尊意書すと其頃の人たるを知るまでなり輩は至極よろし(元亨釋書、東國高僧傳)

ソニイ 尊祐 大和國長谷寺の僧、字は敦

算、俗姓藤原氏、下野の人、十二にして僧となる後智積

院の渾融僧正に密乗を裏け次に法隆寺に俱舍唯識、園城寺にて台教を學ぶ天和元年長谷寺に上りて尊如僧正に親

ソニイ 尊意 葦齋、姓氏詳かならず洛東知恩院に圓光大師の讚賛あり其記に永享八年四月十五日沙門

覺、建長二寺に遷りて逝く敕して諡を佛果禪師と賜ふ(本朝高僧傳)

ソンカウニワウ 尊果尼王 後西院

四年十一月二品に叙せらる 宽元四年四月寂す 年四十三

ソウカイ 尊海 高僧、字は圓頓、武州足立郡の
人、泉福寺の信尊法師に就きて剃髪受戒し神機顎脫にして顯密の旨を解す初め武藏の慈光寺に住し處々の請招に應じ往て法を説く郡司崇信し仙波の東に築きて住せしむ海又籍を京の叡山に置きて宗教を研究せり七年を經心賀憎正の室に入りて七科の法要を專へ三重の派各を極め

古人藤原氏の生む所なり延寶三年六月生る、壽宮と稱す
大和二年九月光照院に入る貞享三年四月蓮髮し戒を僧玄
龍に受く初の名は尊慶又尊秀後ち今の名に改む享保四年
一月薨す年四十五、大規と號して花園院に葬むる(野史)

(妙法院門跡傳)
ソンクワイホシンワウ 尊快法親王
三寶院の法主、京極家仁親王の子にして櫻町帝の養子たり、延享三年十一月二日生る良宮と號す、寶曆九年十月廿六日親王となる同年十二月九日入室得度す寛政五年十月十七日一品に叙せられ同年二月九日寂す常叔院と

て歸り佛地院を創して盛に台教を弘む僧俗多く歸す關東の古學は海を以て中興となす是に由て東國の天台教寺五百八十は波山に附屬せり、又佛藏院を建て求聞持の法を修す明星感應して出現す今筑波山の明星水、明星宮は影臨の地と稱せらる昔し慈覺大師鍬を此寺に駐め修法感を得しより六百年の後海修感を同くす海三科の義を立てて自家の法門に擬す一に曰く止觀、二に曰く十行出假の菩薩、三に曰く變易の名言と信尊滅後泉福寺の衆をも兼領す波山と泉福寺との間を往來するに牛に乗りて口に十行出假所依の文を誦して止まず琵琶橋附近の農夫慣聞いて之を諸んず仲夏苗を植うる男女俗謡に作りて之を歌ふに至る其感化想ふべし海、慧心以來十九通の印信を以て泉福寺に收めて累代相承の譜となす弟子宥海博識なり嗣で泉福寺に住し顯密論談鈔、肝心要義鈔、心觀明了鈔等數十巻を著はす皆海の傳に依る(本朝高僧傳)

四年十二月二十九日誕生教宮と號す、十五年七月二十日濟深法親王の跡を相續し正徳三年八月靈元天皇の御子となり九月二十四日親王宣下あり俗名榮懷（ヨシカ）と申す別當三條中納言公充に敕して二十八日入寺得戒を專尊院僧正某に受け享保七年十二月十二日南部東院に兼住し延享五年二月十八日寂御年四十八、光明心と號す（詰所系圖、野史）

リンカク 存覺 真宗の僧、名は光玄、父は覺宗昭の長男、母は播磨の局、衣服寺敬佛の女、伯耆親顯の猶子となる青蓮院慈道親王の門侶法印權大僧都小路常樂臺と號す、存覺正應三年六月四日生れ應安六年二月廿七日を以て寂す年八十四（諸宗祖略傳）

リンカク ホフシンワウ 尊覺法親王 後成天皇第十の皇子、一乘院に住す二品に叙し興福清水寺の別當なり明了院宮と號す、寛文元年七月廿六日薨年五十四

リンカクホフシンワウ 尊覺法親王 順天皇第五（又曰く第一）の皇子、天台座主となり治山十文永元年薨す年五十梶井第十九世の門主なり

リンガニワウ 尊賀尼王 後水尾天皇第十六皇女、母は權中納言四辻大納言季繼の女、初睦宮と稱寛文二年十二月六日入室得度す天和三年六月一日薨す三十、寶池光院宮と號す

リンキホフシンワウ 尊熙法親王 伏見天第八の皇子、母は春日局徵山に住す桂園院と號す

リンクワイホフシンワウ 尊快法親王 法院の法主、俗名寛成、圓融房と號す、後鳥羽院の弟子、母は修明院贈左大臣範季の女、承久二年八月二日王となる三年四月天台の座主に任ぜられ尋で辭す承元

ソングワホフシンワウ 尊光法親王
後水尾天皇第十の皇子、諱は良賢、正保二年誕生、榮宮と稱す、承應三年親王となり明暦二年知恩院に入り得度す法諱尊光、延寶七年二品に叙し同八年正月六日薨す年三十六、無量感王院宮と號す安永七年一品を贈る（皇胤細運錄）
ソンケウ 尊敷 妙法院の法主、官大僧正に至る西園寺太政大臣公相の子、永仁四年十二月十七日天台の座主に任ぜられ法務三代護持僧たり（妙法院門跡傳）
ソンケン 尊賢 豊簡、伊豫法眼と號す（皇朝名盡拾遺）
ソンコホフシンワウ 尊悟法親王 伏見天皇第五の皇子、圓滿院に入る本名吉永、母は權大納言局參議具氏の女、延文四年薨す（皇胤細運錄、僧官補任）
ソンサ テンボ 存佐天甫 神僧、天甫と號す、奥州大野氏の子、十五にして正法寺に下髪す受具の後南遊して東木に遠州松巖寺に見え依止すること五年、辭して薩州に往き愚丘に福昌寺に謁す次に長州に過り足翁に大寧寺に參す永正十四年丁丑の歲趺坐して化す年六十九、法歳五十五なり（日本洞上聯燈錄）
ソンシウニワウ 尊秀尼王 後西院天皇第四の皇女、樂宮と稱す、中宮寺に入る享保七年薨す年六十二
ソンシン 尊信 法相宗の僧、攝政藤原教實の子、圓實僧正に隨て落髮して戒を受く法相を研習しました圓憲、專英の二師に就て蘊奥を究む天資英才加ふるに勤勞を以てす故に本宗のみならず廣く他教にも涉獵するところあり寶治元年大會に主座となりて維摩經を講す後師命に遅て大乘院に住す幾くもなく興福寺を管す尊で法務

に任ぜらる長谷寺、菩提山を兼領して大僧正に轉じ弘安六年七月十二日寂す、弟子慈信繼きて法務を管す(本朝高僧傳)

リンシンニワウ 尊信尼王 智恩寺比丘尼
開院宮直仁親王の女王、母は近衛基熙の女八百君なり、享保十九年十月九日誕生、榮宮(ヨシノミヤ)と號す、元文三年二月十二日智恩寺法脈相續真信と法號す、延享二年十二月二十七日得度す年十二、九年太政大臣近衛家久の猶子となる天明八年正月洛中火あり院室焼亡後舊地に移りしが享和元年九月二十六日薨去す年六十七(詔所系圖、野史)

リンシンホフシンワウ 尊眞法親王 青蓮院
蓮院の法主、俗名成輔、伏見貞建親王の子にして櫻町帝の養子たり、延享元年正月十九日生る、母は通泉院と號す、初め一乘院に入り後勅令に依り青蓮院に移る同十二月十三日親王となる同三年二月十九日堯恭を師として受戒す明和元年十二月二品に叙し十二月天台の座主に任せらる天明五年十二月廿五日一品に進む文化十三年八月十三日准三后となる文政七年三月十八日寂す無畏王院宮と號す(青蓮院門跡傳、野史)

リンシユホフシンワウ 尊性法親王 後高倉院
後高倉院の第二子、後堀河の皇弟、母は北白河院、二品に叙し天台座主に補す後辭退せり貞永元年八月二十五日再補す禪僧正に任ぜらる文應元年九月寂す年四十六、綾小路宮と號す(皇胤紹運錄)

リンシユホフシンワウ 尊守法親王 土御門帝の第二皇子、無品、延暦寺に入り高橋宮と號す

リンシユン 尊俊 畫僧
官、僧正に至る文筌と號す、和州菩提山報恩院に住す畫法を狩野元信に學びて佛像及び難畫を能くす俗に菩提山の古僧正と呼ぶ俗姓は柳原氏、龍虎墨梅竹及び半身の達磨等皆雅趣あり又僊歌及び僊字の書を善くす德行餘りあり享祿年中の人の(本朝畫史、扶桑畫人傳)

リンジュンホフシンワウ 尊純法親王 青蓮院
の法主、伏見宮邦房親王の子、後法皇政仁の猶子となり親王に任す寛永二十一年十一月五日承應二年正月

ス（青蓮院門跡傳）

リンショウニワウ 尊乘尼王 中御門帝の女として典侍藤原氏の生む所なり享保十五年二月生る龜宮と稱す、十六年十月光照院を繼ぐ元文五年九月寺に入り本髮す寶曆六年色衣を聽さる天明元年十月二品に叙す寛政元年三月薨す年六十、天融と號す花開院に葬むる二年二月淨明心院と追號す（野史）

リンショウニワウ 尊勝尼王 後西院帝の女にして宮人藤原氏の生む所なり延寶四年八月生る貞宮と稱す、天和三年十一月三日知恩院に入りて賜食となる貞元年六月薙髮して戒を知恩院の惑榮に受く元祿十六年二月薨す年二十八、知生院等譽香周と號し知恩院に葬むる（野史）

リンシヨウホシンワウ 尊證法親王 沢水尾第十三の皇子、初の名は周賢、尊純親王の弟子となり青蓮院に入る萬治九年天台座主となる元祿七年薨す十四年、諡して後桂運院の宮と號す書を能くし一家を成す世に尊證法親王流と云ふ（野史）

リンジヨホシンワウ 尊助法親王 天台座主、土御門院の第一子、青蓮院宮と稱す、三たび天台座主となる二品に叙す正應三年十二月薨す（天台座主記、皇胤紹運錄）

リンセイニワウ 尊清尼王 後陽成帝の女にして宮人目内侍の生む所なり慶長十八年生る、寛永十九年四月光照院に入りて剃髮し尊嚴と名づく後ら今の名改む寛文九年三月薨す年五十七、崇山玉譽と號す花開院に葬むる（野史）

リンセウホシンワウ 尊昭法親王 一院の法主、後尊賞と改む、法皇誠仁第十三の皇子、母藤原式部刑局、今城中納言定淳の女、元祿十二年十一月二十二日生る多喜宮と號す、俗名庶賢、同十五年二月室寶永六年三月親王となる同四月出家享保四年五月二日に叙せられ興福寺の別當となる一乘院の第三十七世の主なり延享三年九月十四日寂す年四十八、大和菅原に葬り廣莊嚴院と號す（三寶院門跡傳）

リンゼン 尊善 畫家、狩野元信に學びて畫を

リンタイ シウホウ 存岱秀峯 禪僧、模
範に普門寺に謁し入室して旨を悟る後常陸に至り龍谷寺
を創し明應丁巳最乗寺に住す(日本洞上聯燈錄)

リンタウホフシンワウ 尊道法親王 徒
伏見帝第十の皇子、青蓮院に入る一品に叙し天台座主に
補せられ應永十年薨す書を能くす十樂院宮と號す(皇胤
細述錄、諸門跡譜)

リンチ 尊知 巨勢派の畫人、薙髪して法眼に
叙せらる建久年中の人(扶桑畫人傳)

リンチン 尊敵 足利持氏の第七子、僧となり
蓮花王院若宮別當となる

リンチンホフシンワウ 尊珍法親王 魁
山天皇第二十四の皇子、聖誕院に入り三后に准ぜられ圓
城寺長吏となる故あり配流せられて死す

リンチヤウ タイドウ 存長大洞 禪僧、
圓菴に參じ其の法を得て第一座に居す明應丙辰菴遷化す
嗣で其の席を補す晩年院事を謝し徑行して武州に至る士
庶其の道化を慕ひ地を捨て精舍を建つ骨晶の長泉寺、市
河の永福寺、菖蒲の長龍寺等皆請じて開山となす、永正
己卯十月十七日世を謝す露骨分て長泉永福長龍の三處に
塔す法嗣に天瑞寺の運、海印寺の義、堅雲寺の亘の三人
あり(日本洞上聯燈錄)

リンテウホフシンワウ 尊朝法親王 光
嚴帝の第四の皇子、仁和寺に入る永和四年薨す年三十五
輔親王の子、天文二十一年八月生れ正親町帝の猶子とな
る、永祿元年十一月青蓮院に入り五年十一月剃髪し准三
宮覺恕に從て法を學び又教を尊鎮法親王に受く六年十一
月親王となる八年十二月四天王寺別當に補す天正十二年
正月二品に叙す業を大阿闍梨亮信に受く十二月再び延暦
寺を造る是より先き元龜二年九月座主第一百六十六世覺
恕の時に當りて織田信長兵を發し火を縱ちて山門を襲ひ
諸堂坊舍蕩盡す是に至りて再び成る座主廢絶する十二年
明年二月更に天台座主となる慶長二年二月寂す年六十六
龍池院と號す尊朝書を善くし唐崎松の記を著す世に傳は

リンデンホフシンワウ 尊博法親王 青

蓮院の法主、俗名尊教、後土御門帝の第二子、母は權大納言長賢の女准三宮朝子なり、文明八年八月廿八日親王となり尊應の附弟となる文龜四年正月廿六日寂す不遠院と號す(青蓮院門跡傳)

ゾンニヨ 存如 淀宗の僧、本願寺第七世の僧、名は圓兼、贈内大臣兼宣の子となる、権大僧都に任じ長祿元年六月十八日寂す年六十二(尊卑分脈)

ゾンボウホフシンワウ 尊峯法親王 京極仁親王の子、権町帝の養子、延享五年知恩院を相続し二品となる天明八年薨す年四十八

ゾメギ マサノア 染木正信 千葉の添番、韓人にして李氏なり、豐臣吉征韓の時小童にして姉と共に片桐市正に生捕れて皇國に來れり市正此二人間に唐山の童子の衣服を著せて臺に乘せ天樹院(千姫)にまゐらせたり姉は成長して早尾と云ひ弟は老女染木の養子となり染木八右衛門正信といひて兩人共に生涯仕へたり其子有利右衛門正美といひて同じ君に仕へ添番を勤めたり然るに寅子なくして血脈絶えたりとぞ(鬼園小説)

ゾメザキ マサノア 染木正信 千葉の添番、名は延房、幼名を八郎と云ひ次で又兵衛と稱す、文政元年十月武州北豊島郡三輪村なる對州侯の下屋敷に生る、十一歳にして初めて藩主の小姓役を務む性文學の好み、京傳、馬琴、三馬等の著書を愛讀し就中爲永春笑と號す好み、十七歳の時遂に泰本の弟子となり爲永春笑と號して年々創作を出し袋ちの號を襲うて二世爲永春本と號す明治維新後斷然著述家となり同九年東京入新開社に入りて編輯に從事する十年間、明治十九年春中風症に犯され同月廿七日遂に没す年六十九、下谷區豈住町善玉院に葬る、著はす所の小説中北善美談・時代最

ゾメドノキサキ 染殿后 文徳帝の皇后、蘇原明子(アキラカイコ)太政大臣良房の女清和及び無

て宗心寺を建て勢州長島に於て花林寺を立つ皆龍を以て第一世となす慶長癸卯四月七日化す(日本洞上巻登録)

ゾリマチ ムカク 反町無格 無眼流劍術

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と稱す(元亨釋書、東國高僧傳)

ゾロリ シンサンジン 蘇嶺山人 江戸の詩人、名は眞鄉、字は舉叔、一號は見雅居士、天明四年五月十五日歿す年五十七(江戸名家墓所一覽)

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と稱す(元亨釋書、東國高僧傳)

女通篤す喚呼の聲隣舍に達し衆聚合す怪異然として將に去らんとす曾與請ひて直士を招きて怪を執へしめ以て狀

告ぐ吉邦燭點じて之を檢す乃ち圓頓禪要にして垂面

納言長賢の女准三宮朝子なり、文明八年八月廿八日親王となり尊應の附弟となる文龜四年正月廿六日寂す不遠院と號す(青蓮院門跡傳)

ゾンニヨ 存如 淀宗の僧、本願寺第七世の僧、名は圓兼、贈内大臣兼宣の子となる、権大僧都に任じ長祿元年六月十八日寂す年六十二(尊卑分脈)

ゾンボウホフシンワウ 尊峯法親王 京極仁親王の子、権町帝の養子、延享五年知恩院を相続し二品となる天明八年薨す年四十八

ゾメギ マサノア 染木正信 千葉の添番、韓人にして李氏なり、豐臣吉征韓の時小童にして姉と共に片桐市正に生捕れて皇國に來れり市正此二人間に唐山の童子の衣服を著せて臺に乘せ天樹院(千姫)にまゐらせたり姉は成長して早尾と云ひ弟は老女染木の養子となり染木八右衛門正信といひて兩人共に生涯仕へたり其子を利右衛門正美といひて同じ君に仕へ添番を勤めたり然るに寅子なくして血脈絶えたりとぞ(鬼園小説)

ゾメザキ マサノア 染木正信 千葉の添番、名は延房、幼名を八郎と云ひ次で又兵衛と稱す、文政元年十月武州北豊島郡三輪村なる對州侯の下屋敷に生る、十一歳にして初めて藩主の小姓役を務む性文學の好み、京傳、馬琴、三馬等の著書を愛讀し就中爲永春笑と號す好み、十七歳の時遂に泰本の弟子となり爲永春笑と號して年々創作を出し袋ちの號を襲うて二世爲永春本と號す明治維新後斷然著述家となり同九年東京入新開社に入りて編輯に從事する十年間、明治十九年春中風症に犯され同月廿七日遂に没す年六十九、下谷區豈住町善玉院に葬る、著はす所の小説中北善美談・時代最

ゾメドノキサキ 染殿后 文徳帝の皇后、蘇原明子(アキラカイコ)太政大臣良房の女清和及び無

て宗心寺を建て勢州長島に於て花林寺を立つ皆龍を以て第一世となす慶長癸卯四月七日化す(日本洞上巻登録)

ゾリマチ ムカク 反町無格 無眼流劍術

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と稱す(元亨釋書、東國高僧傳)

ゾロリ シンサンジン 蘇嶺山人 江戸の詩人、名は眞鄉、字は舉叔、一號は見雅居士、天明四年五月十五日歿す年五十七(江戸名家墓所一覽)

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と稱す(元亨釋書、東國高僧傳)

ゾロリ シンサンジン 蘇嶺山人 江戸の詩人、名は眞郷、字は舉叔、一號は見雅居士、天明四年五月十五日歿す年五十七(江戸名家墓所一覽)

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と稱す(元亨釋書、東國高僧傳)

ゾロリ シンサンジン 蘇嶺山人 江戸の詩人、名は眞郷、字は舉叔、一號は見雅居士、天明四年五月十五日歿す年五十七(江戸名家墓所一覽)

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と稱す(元亨釋書、東國高僧傳)

ゾロリ シンサンジン 蘇嶺山人 江戸の詩人、名は眞郷、字は舉叔、一號は見雅居士、天明四年五月十五日歿す年五十七(江戸名家墓所一覽)

ゾレン 薙蓮 高僧、何れの處の人たるを知らず素より道譽あり白鳳年間會々皇后病あり帝敕して藥師寺を建て皇后の爲めに願を祈る然れども未だ佛利の式を知らず連爲めに入定して龍宮の伽藍を見定後圓を慕して進呈す帝大に悦ぶ工綴りて即ち蓮に敕して之れに居らしむ其の寺最も宏麗と

サ	一〇七五	ア	一
シ	一二〇三	イ・牛	一四七
ス	一三三三	ウ	三四一
セ	一三七三	エ・エ	四〇一
ソ	一四一七	オ・ヲ	四三三
		九六九	九九〇

大正十五年三月十七日印刷
大正十五年三月二十日發行

新版大日本人名辭書【上卷】

著作兼發行者 東京市神田區駿河臺西紅梅町十二番地

大日本人名辭書刊行會

右代表者

大島秀雄

印刷者

望月清矣

印刷所

東京市京橋區山下町一番地

英文通信社印刷所



發行所

東京市神田區駿河臺西紅梅町十二番地

振電話 大手五五八五番

替東京二二四五三番

大日本人名辭書刊行會

龍首譜

大日本人民詩歌合輯

明治三十一年十二月五日

終

